

北大植物園資料目録

第5号

Catalogue of Collections

Botanic Garden  
Hokkaido University

No.5

所蔵考古資料目録(1)

旧豊平川右岸丘陵地出土土器の検討  
—植物園所蔵名取武光・後藤寿一調査資料再報—  
松田 宏介

北海道大学 北方生物圏フィールド科学センター 植物園  
Botanic Garden  
Field Science Center for Northern Biosphere, Hokkaido University

July 2004

## 北大植物園資料目録第 5 号の発刊に際して

平素より、北海道大学植物園・博物館の活動にご理解・ご支援をいただき、誠にありがとうございます。

このたび、北大植物園資料目録第 5 号を刊行する次第となりました。本目録は、これまでの目録と異なり、スタッフによる調査・整理をとりまとめたものではなく、植物園・博物館利用者である北海道大学大学院文学研究科、松田宏介氏の調査・整理の成果を目録としたものです。

私ども北大植物園・博物館は 120 年を越す歴史の中で、さまざまな博物標本・学術標本を収集・管理してきました。その結果、扱う分野はあまりにも多岐にわたることとなりました。所蔵する博物標本が社会の財産である以上、その利活用を促進するために標本目録の刊行を行っていますが、現代における各分野の先端的な利用に耐えうるような目録を作成することは、限られたスタッフの能力では容易なことではなく、目録として扱う分野に偏りが生じてしまう問題がありました。

今回、松田氏による植物園・博物館所蔵旧豊平川右岸出土土器資料の詳細な調査の結果、これまで植物園・博物館が管理していた資料情報に大幅に情報を追加することが可能となっただけでなく、その実測図・写真を含む成果を北大植物園の資料目録として掲載することをご快諾いただいたことで、植物園・博物館スタッフのみでは作成することのできない、専門的な情報が付与された目録を刊行することが可能となりました。ここに、心より御礼申し上げたいと思います。

北大植物園・博物館の所蔵資料は、北海道大学の構成員のみならず、他大学、諸外国の研究者、また一般の方々にも利用されています。利用される皆様にとって、より利用しやすい博物資料となるように資料管理・保存を継続してゆく所存でありますが、多くの方のご協力を得られるならば、所蔵資料はさらに有効な研究資源・教育資源となることと思います。21 世紀に生きる私たちが 120 年前の資料を利用できるように、次世代の利用者が現在以上の価値を有する同じ資料を利用できるようにすることが、私ども北大植物園・博物館の使命と位置づけております。皆様のご協力の下、この使命を達成できるならば望外の幸せであります。今後とも、北大植物園・博物館の活動へのご理解、ご支援をお願い申し上げ、発刊の挨拶にかえさせていただきます。

2004 年 7 月

北海道大学植物園・博物館

## 本文目次

はじめに	1
1. 旧豊平川右岸丘陵地出土の遺跡群および出土資料の概要	1
2. 再検討の手順	1
2-1. 資料の現状と資料化の範囲	1
2-2. 資料化の方法	2
2-3. 注記・ラベルの検討	2
2-3-1. 後藤寿一による注記・ラベル	2
2-3-2. 名取武光による注記・ラベル	2
2-3-3. その他の注記・ラベル	3
2-4. 資料の照合と出土遺構の推定方法	4
3. 資料	4
3-1. 続縄文前葉（H317期～江別太1期）に属する資料	4
3-1-1. H317期に属する資料	4
3-1-2. H37栄町期に属する資料	5
3-1-3. 江別太1期に属する資料	6
3-2. 続縄文中葉（江別太2期～後北C <sub>1</sub> 期）に属する資料	6
3-2-1. 江別太2期に属する資料	6
3-2-2. 後北A期に属する資料	7
3-2-3. 後北B期に属する資料	8
3-2-4. 後北C <sub>1</sub> 期に属する資料	9
3-3. 続縄文後葉（後北C <sub>2</sub> -D期～円形・刺突文土器群期）に属する資料	12
3-3-1. 後北C <sub>2</sub> -D期に属する資料	12
3-3-2. 円形・刺突文土器群期に属する資料	15
3-4. 擦文期に属する資料	16
4. 資料の出土遺構および共伴関係	16
4-1. 後藤寿一調査資料	16
4-2. 名取武光調査資料	18
4-2-1. 旧報告と照合された資料	18
4-2-2. 旧報告と照合されない資料	18
5. 若干の考察	19
5-1. 旧豊平川右岸丘陵地における土坑墓群の形成	19
5-2. 道央部における土器群の構成	19
5-3. 名取武光の調査活動に関して	20
おわりに	21
謝辞	21
注	21
引用・参考文献	22

## 挿図目次

図 1 旧豊平川周辺の地形	3	図版 7 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(6)	55
図 2 旧豊平川右岸丘陵地の遺跡調査地点	3	図版 8 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(7)	56
図 3 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(1)	31	図版 9 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(8)	57
図 4 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(2)	32	図版 10 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(9)	58
図 5 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(3)	33	図版 11 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(10)	59
図 6 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(4)	34	図版 12 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(11)	60
図 7 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(5)	35	図版 13 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(12)	61
図 8 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(6)	36	図版 14 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(13)	62
図 9 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(7)	37	図版 15 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(14)	63
図 10 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(8)	38	図版 16 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(15)	64
図 11 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(9)	39	図版 17 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(16)	65
図 12 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(10)	40	図版 18 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(17)	66
図 13 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(11)	41	図版 19 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(18)	67
図 14 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(12)	42		
図 15 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(13)	43		
図 16 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(14)	44		
図 17 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(15)	45		
図 18 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(16)	46		
図 19 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(17)	47		
図 20 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(18)	48		

## 表目次

表 1 旧豊平川右岸丘陵地出土土器属性表(1)	25
表 2 旧豊平川右岸丘陵地出土土器属性表(2)	26
表 3 旧豊平川右岸丘陵地出土土器属性表(3)	27
表 4 旧豊平川右岸丘陵地出土土器属性表(4)	28
表 5 旧豊平川右岸丘陵地出土土器属性表(5)	29
表 6 旧豊平川右岸丘陵地出土土器属性表(6)	30

## 写真図版目次

図版 1 旧豊平川右岸丘陵地出土土器に見られる注記・ラベル	49
図版 2 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(1)	50
図版 3 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(2)	51
図版 4 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(3)	52
図版 5 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(4)	53
図版 6 旧豊平川右岸丘陵地出土土器(5)	54

# 旧豊平川右岸丘陵地出土土器の検討

## - 植物園所蔵名取武光・後藤寿一調査資料再報 -

北海道大学大学院文学研究科 松田宏介

### はじめに

本稿では、1930年代に調査され北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園（以下「植物園」と略記）に所蔵されている、旧豊平川右岸丘陵地出土資料の報告を行う。この丘陵地の遺跡群は、戦前には北海道最大規模のものとして知られ、縄文期の土坑墓や擦文期の竪穴住居址・古墳群を中心に多くの遺構・遺物が検出された。今回紹介する大半は縄文期の土坑墓出土資料で、名取武光・後藤寿一らによって調査され、断片的な報告にとどまっていたものである。以下資料の学史的経緯およびその現状、資料化や既報告との照合方法を説明する。その後、個別に資料を記載し、出土遺構・共伴関係の検討を行う。最後に、今回の検討から得られた旧豊平川右岸丘陵地の遺跡および出土資料、さらには昭和初期の調査活動に関し、若干の考察を加える。

### 1. 旧豊平川右岸丘陵地の遺跡群および出土資料の概要

現在の江別市域、野幌丘陵の北西端に位置する旧豊平川右岸丘陵地の遺跡群は、1931年（昭和6）後藤寿一が発見し周知のものとなった（図1・図2）。それ以後後藤をはじめ名取武光・河野広道・高倉新一郎・須田信のほか、多くの研究者・好事家により発掘が行われた。これらの発掘調査については各氏により報告がなされ（河野1933a, 名取1933, 後藤1933・1935a・1935b, など）、そこで得られた知見により「後北式」（河野1933b）の設定・編年案の構築をはじめ、北海道における考古学研究の基礎が築かれた。

しかし当時の報告は調査内容の一部にとどまり、後に資料・フィールドノート等の検討・再報告がなされているが（市立旭川郷土博物館編1976, 宇田川編1984, 市立函館博物館1994, 遠藤・大沼1999, 北広島市教育委員会編2002, 松田・加藤2004など）、詳細は未だ不明な点も多い。またその出土資料も各地に分散、ないし散逸した状況にある。中でも、植物園所蔵の名取・後藤調査資料は全容が不明のままであり、一部の写真・実測図等が図録や論文中で掲載されたにとどまる。このため今回そのすべてではないが、資料報告を行う次第である。

昭和初期、旧豊平川右岸丘陵地においては、複数の地点で調査が行われた。名取は町村農場（図2-VIII）内の数地点を調査し、10基の土坑墓を発掘したとある（名取1933）。これらは現在の坊主山遺跡・町村農場1遺跡等に相当する。後藤はこのほか、図2に見られるように、旧豊平川右岸丘陵地の各地点で調査を行っている（後藤1933・1935a・1935b, 遠藤・大沼1999, 北広島市教育委員会編2002など）。これらの調査の結果、植物園には現在の旧豊平河畔遺跡・江別第二チャシなど複数地点の出土資料が混在する状態にある<sup>1)</sup>。帰属時期では断片的なものも含めると縄文期から擦文期までの資料が確認されるが、今回報告を行う資料は縄文期が主体を占め、大半が土坑墓出土のものであると推測される。

### 2. 再検討の手順

#### 2-1. 資料の現状と資料化の範囲

現在植物園には登録件数にして2万点弱の考古資料が所蔵されている（加藤2001）。大半はプラスチック製のコンテナにより保管されており、完形・半完形の土器や石器・骨角器等の一部については、植物園博物館本館において収蔵・展示されている。本稿で報告する、旧豊平川右岸丘陵地出土資料の一部も後者に当たる。本来であれば、旧豊平川右岸丘陵地出土資料全体を再検討し、全容を報告するべきであるが、資料の出土地の特定をはじめ膨大な時間・労力が予想されるため、今回完形・半完形の土器139点に限り報告を行う。その他の資料の報告については今後の課題としたい。

今回報告する 139 点の資料が、現在の状態で収蔵されるようになったのは 1995 年（平成 7）以降のことである。平成初期における植物園博物館本館の建物改修後、資料が再搬入され現在に至る。これらの資料は建物改修以前から博物館本館で展示されており、いずれかの時点で展示目的で資料の抽出が行われたものと推測される。現在コンテナに保管されている破片資料は、木箱に収蔵されていた<sup>2)</sup>。これらの破片資料には、完形個体同様の注記・ラベル等が付されたものが見られ、また名取により撮影されたガラス乾板で確認される完形資料にも、現在照合できないものが少なからずあることから、本来器形を保っていたが後の収蔵段階で崩壊した個体がかかなりあるものと推測される<sup>3)</sup>。一部の資料においては、名取・後藤によると思われる破片の接合・石膏入れが行われている。

## 2-2. 資料化の方法

資料化に当たり、遺存状態が悪化している一部の個体に対し、破片の接合・石膏入れを行った。その上で全点実測図を作成、必要に応じ一部拓本を併用した。併せて対象とした全資料の写真を撮影した。撮影は機材・場所・技術等の都合から、すべて左上方からの自然光を主光源としたもので、撮影後自家現像・焼付けを行っている。また資料の標本番号順に属性表を作成した（表 1～表 6）。掲載した実測図・拓本の縮尺は 3 分の 1 である。写真の縮尺は原則として約 3 分の 1 であるが、一部の小型資料は約 2 分の 1 とした。ただし注記・ラベルの部分写真（図版 1）のみ、縮尺任意である。

## 2-3. 注記・ラベルの検討

植物園では、現在 5 桁のアラビア数字による資料の登録・管理が行われている。本稿でもこの標本番号を【】内に表記した。今回報告する資料群は、標本番号による登録開始以前に収蔵されたものであり、主に名取・後藤により複数の方法で注記・ラベルの貼り付けが行なわれている。それらの中には、ラベルの剥脱や底部外面に注記した結果、磨耗したもののなど、現在その内容が確認できなくなっているもの、あるいは調査時の情報が全く注記されていない資料も存在する。このため、全ての資料から有意な情報が引き出せたわけではないが、一部においては資料の出土状況・共伴関係を復元することが可能である。以下作成者ごとに注記・ラベルの種類を記述する。

### 2-3-1. 後藤寿一による注記・ラベル

後藤の調査資料には統一的な注記・ラベルの貼り付けが行われている。注記は、エスペラント語で土坑墓を表わす「T-f,T」に、土坑墓番号および遺構内出土資料の点数を表すアラビア数字、その後遺物番号を表すエスペラント文字を記載している（遠藤・大沼 1999, 図版 1-1・2）<sup>4)</sup>。後藤は当初遺物番号をアラビア数字で表わしたが、後にエスペラント文字に統一して書き替えており、こうしたアラビア数字を用いた初期の例や、「T-f,T」を省略して土坑墓番号と出土点数・遺物番号のみが注記された資料も存在する（例えば【34440】には「44 6, 2」とある）。注記はおもに底部外面あるいは胴部内面に朱墨で記載される。

ラベルは「壽」の朱印に「GJ」と記載された同一規格の用紙を用い（図版 1-3）、土器内面に貼り付けられる。注記とほぼ同様の書式をとる。違いは調査地である「江別兵村町村農場」と、アラビア数字により調査年月日が記載されることである。注記による内容を訂正した例があることから、ラベルは注記より時間的に新しいと考えられる。以下「後藤ラベル」と仮称する。

### 2-3-2. 名取武光による注記・ラベル

名取調査資料には、統一的な注記が行われておらず、全く注記されないものも多い。「MACHIMURA FARM」といったローマ字のほか、「M. F H -」・「H.」「HA -」・「No.」の後にローマ数字やアラビア数字が朱筆されるものがある（写真 1-4・5）。これらの数字は遺構番号と推測され、同様の注記が成されている場合（例えば【39143】には「No. 19 P1」、【14351・25008】には「No. 19 P2」とある）、同一遺構出土資料と判断した。ただし、名取による調査報告（名取 1933）の土坑墓番号と直接対照可能なものはない。ローマ数字とアラビア数字の番号は重複せず、小さい番号は主にローマ数字による表記がなされている。このことからローマ数字による注記は、アラビア数字を使用するものより古いと推測される。また誤記によるものか、「M・F」と「F・M」といった微妙な差異がある。個々の注記がいつの時点で行なわれたものか



図1 旧豊平川周辺の地形（地理調査所昭和34年発行2万5千分の1地形図「江別」を複製・縮小し一部加筆）

明らかではないが、出土遺構等が記載されない資料が多いことからしても、調査よりやや後の時点のものと推測される。

今回検討対象としたほぼすべての資料には、調査地・出土遺構・調査者などが記載されたラベルが貼り付けられる。「博物館」の文字と野線が印刷された規格的なラベル（図版1-6）のほか、同様のサイズに裁断した紙片（図版1-7）を使用している。後者がやや簡略な表記をとり、横書・縦書といった書式の点で異同があるが、それ以外には特に明確な差異は見られず、ほぼ同時期のものとして判断した。以下両者を併せ「博物館ラベル」と仮称する。調査地は「江別兵村 町村農場」あるいは「町村農場」である。出土遺構は「墳墓」あるいは単に「墓」「墓出土」とあるものが大多数で、遺構番号が特定されている例（図版1-4 右側）は一部である。

調査者は名取か後藤であるが、「名取武光」・「名取」・「後藤寿一」・「後藤」といった表記の違いや、不明のためか記載されない例もある。調査者の区分がある点などから、これらラベルの作成時期は後藤寿一調査資料が植物園に收藏された以後のものと推測できる。また、注記以上に遺構番号等の詳細が記載されない点、調査者の情報が記載されず、ラベル作成時点で既に不明となっていたと推測される資料が存在すること、後藤ラベルが付された資料に調査者「名取」とする誤記が見られる点などから、資料收藏後かなり時間が経過してからのものと推測される<sup>5)</sup>。

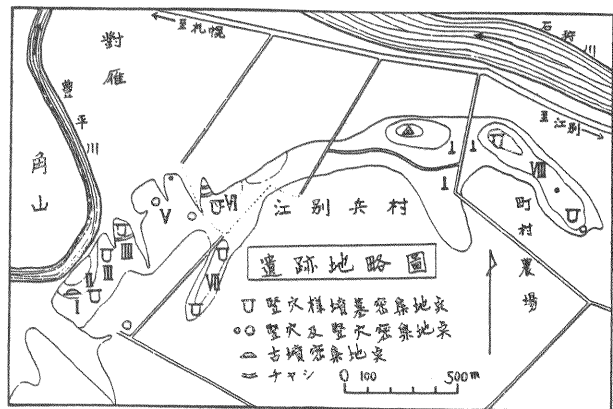


図2 旧豊平川右岸丘陵地の遺跡調査地点  
（後藤1935 [1976] より転載）

### 2-3-3. その他の注記・ラベル

後藤・名取による以外の注記・ラベルも複数種類見られる。1cm 弱の小紙片に一桁ないし二桁の算用数字を印刷したラベル（図版1-8）や、平成初期の旧農学部博物館改修時に市川秀雄氏が資料管理のため付した三桁の算用数字を印刷したラベル（図版1-7 右側）などがあげられる。このほか、一桁の数字のみのものや、「No.」に続けて一桁の数字が記載さ

れた紙片が付されている例がある。多くは作成者・作成時も不明であり、調査内容を反映している可能性が低いと判断した。このため以下の記載では特に触れていない。

## 2-4. 資料の照合と出土遺構の推定方法

上述した注記・ラベルの記載や、当時の調査報告（名取 1933, 後藤 1935）に掲載された写真・拓本等と照合させ、資料の出土遺構・同伴関係の復元を行った。さらに名取調査資料においては、植物園に所蔵されている調査・報告時のガラス乾板、また後藤調査資料においては、遠藤・大沼（1999）、北広島市教育委員会編（2002）に掲載された調査遺構一覧や拓本・写真等との照合を行い、資料の同定を試みた。さらに一部の資料においては、北広島教育委員会所蔵の後藤調査ノートを閲覧し、未報告の内容であるが活用させていただいた。

このほか出土状況を直接復元するものではないが、後藤（1934）・名取（1939）・千代（1965）などの論文や、『北海道原始文化聚英』（犀川会編 1933, 以下『聚英』と略記）、『日本原始美術』第 1 巻（山内・甲野・江坂編 1964, 以下『美術』と略記）、『縄文土器大成』第 5 巻（加藤・澤編 1982, 以下『大成』と略記）、『縄文土器大観』第四巻（小林編 1989, 以下『大観』と略記）といった図録類に掲載された写真・実測図との照合も行った。

## 3. 資料

以下帰属時期ごとに資料を区分し、記載を進める。当該地域における続縄文期の土器編年は、本資料群を基に構築された 1930 年代の業績（河野 1933, 後藤 1935, 名取 1939）以来、その後多くの研究者により検討されている（河野 1955・1958, 千代 1965, 森田 1967, 木村 1975・1982, 大沼 1980・1982a・1982b・2001, 高橋 1984 ほか多数）。特に 1960 年代以後、土器型式の名称変更・再設定等が議論されたが、土器群の時間的変遷過程については現在おおむね一致した状況にあるといえる。本稿では、道央部の続縄文期全般を対象とすることから、鈴木（2003b）に依拠することとする。

### 3-1. 続縄文前葉（H317 期～江別太 1 期）に属する資料

#### 3-1-1. H317 期に属する資料

H317 期に属する資料は、8 個体である。

【38405】（図 3-1, 図版 2-1）は、RL 長条縄文が横走し、口縁部に刺突列が施された鉢である。口縁部突起下に外面からの焼成前穿孔が 1 孔ずつ、計 4 孔施される。外面は赤彩され、一部浅い短沈線を縦位に施す。口縁部一部欠損。「F-M H-23」と底面に朱筆される。名取（1939）第九図 a の資料である。

【38417】（図 3-2, 図版 2-2）は、LR 縄文を横走させた深鉢である。口縁部突起 5 単位。完形。「MA-34」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」とある。既報告とは照合できない。

【39124】（図 3-3, 図版 2-3）は、LR 縄文と口縁部には原体 R の側面圧痕が施された鉢である。2 単位の口縁部突起下に、内面から 2 孔の焼成前穿孔が施される。外面赤彩。口縁部から体部を一部欠損。「H-A-34 上」と朱筆され、2 枚の博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」「江別出土 名取」とある。「前北式」「後期縄文式土器」と書かれた紙片が付されている。既報告とは照合できない。

【38421】（図 3-4, 図版 2-6）は、LR 縄文を横走させ、口縁部に原体 L の側面圧痕が施された鉢である。口縁部に内面からの焼成前穿孔 2 孔。完形。「H-A-34 下」と朱筆され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」とある。名取（1939）第九図 b-9 の資料である。

【34444】（図 3-5, 図版 2-4）は、外面に刻みが施され全面赤彩された小型の鉢である。上面観は舟形を呈する。口縁部約 3 分の 1 欠損。注記なし。博物館ラベルには「町村農場 墓 出土 名取」とある。既報告とは照合できない。

【38436】（図 3-6, 図版 2-5）は、口縁部に外面からの焼成前穿孔が 2 孔施され、外面が赤彩された小型の鉢である。口縁部約 5 分の 1 欠損。注記なし。博物館ラベルには「町村農場 墓 出土 名取」とある。既報告とは照合できない。

【34461】（図 3-7, 図版 2-7）は、無文で内外面とも粗雑な器面調整が施された深鉢である。底部付近がややすぼまる。口縁部一部欠損。「Tf,T.113 15, c」と注記され、博物館ラベルには「江別町村農場 墓 後藤」とある。注記から後



藤の調査による T-f,T.113 15c の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【34460】（図 3 - 8, 図版 2 - 8）は、外面に RL 長条縄文が横走る底部破片である。内外面に幅広の接合面を持つ擬口縁が観察される。注記なし。博物館ラベルには「町村農場 墓 名取」とある。既報告とは照合できない。

### 3-1-2. H37 栄町期に属する資料

H37 栄町期に属する資料は 14 個体である。

【34445】（図 3 - 9, 図版 2 - 9）は、無文で口縁部に内面からの焼成前穿孔が 1 孔施された小型の鉢である。口縁部約 4 分の 1 欠損。「M・F H・21」と朱筆され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 第 21 号墳 名取」とある。既報告とは照合できない。

【34454】（図 3 - 10, 図版 2 - 10）は、横位の粗雑な沈線が施された小型の鉢である。口縁部に外面からの焼成前穿孔が 1 孔施される。口縁部一部欠損。「M・F H - 21」と朱筆され、博物館ラベルには「町村農場 墓出土 (21 号) 名取」とある。既報告とは照合できない。

【38404】（図 4 - 1, 図版 2 - 11）は、口縁部に 1 箇所貼付が施された深鉢である。RL 縄文が縦走し、口縁部には RL 原体による側面圧痕が施される。完形。「M - F H - 21」と朱筆され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 発掘」とある。名取（1939）第九図 b - 7 の資料である。

【34447】（図 4 - 2, 図版 3 - 1）は、無文で底部が二つに分かれた小型の鉢である。口縁部には焼成前穿孔が 1 孔施される。完形。「M・F H - 21」と朱筆され、博物館ラベルには「町村農場 墓 第二十一号墓 出土 名取」とある。名取（1939）第九図 b - 11 の資料である。

【38408】（図 4 - 3, 図版 3 - 2）は、LR 縄文が斜走し、沈線が施された小型の壺である。口縁部に焼成前穿孔が 2 孔施され、外面が一部赤彩される。口縁部一部欠損。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 第 21 号出土 名取」とある。注記は「M・F」と朱筆され、それ以下の文字がラベルにより判読できないが、これまでの例から「H - 21」と推測される。既報告とは照合できない。

【38433】（図 4 - 4, 図版 3 - 3）は、無文で口縁部に焼成前穿孔が 2 孔施された小型の壺である。口縁部一部欠損。「M・F H - 21」と朱筆され、博物館ラベルには「町村農場 墓 (21 号) 名取」とある。既報告とは照合できない。

【38435】（図 4 - 5, 図版 3 - 4）は、小型の鉢が 3 つ接合された特殊な器形である。LR 縄文施文。個別に体部を成形した後、接合する。「M・F H - 21」と朱筆され、博物館ラベルには「町村農場 墓 (21) 号 名取」と記載される。現在 3 つの体部のうち 1 つを欠損するが、名取（1939）第九図 b - 11 の資料である。

【38437】（図 4 - 6, 図版 3 - 5）は、口縁部に焼成後穿孔が 1 孔施された小型の鉢である。LR 縄文施文。外面赤彩される。口縁部一部欠損。「M・F H - 21」と朱筆され、博物館ラベルには「町村農場 墓 (21 号) 名取」とある。既報告とは照合できない。

【38439】（図 4 - 7, 図版 3 - 6）は、口縁部と底部外面にキザミ列がめぐる小型の鉢である。口縁部一部欠損。「M・F H - 21」と朱筆され、博物館ラベルには「町村農場墓 (21 号) 名取」とある。既報告とは照合できない。

【38438】（図 4 - 8, 図版 3 - 7）は、LR 縄文が施文された小型の鉢である。口縁部に外面からの焼成前穿孔が 1 孔施される。口縁部一部欠損。「M・F H - 21」と朱筆され、博物館ラベルには「町村農場 墓 21 号 名取」とある。既報告とは照合できない。

【38440】（図 4 - 9, 図版 3 - 8）は、刺突列に沿って赤彩が施された小型の鉢である。口縁部に外面からの焼成前穿孔が 1 孔施される。口縁部一部欠損。「M・F H - 21」と朱筆され、ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 第 21 号 名取」とある。既報告とは照合できない。

【34439】（図 4 - 10, 図版 3 - 9）は、外面に斜行縄文が施された小型の注口鉢である。注口部・口縁部一部欠損。注記なし。博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」とある。既報告とは照合できない。

【38441】（図 4 - 11, 図版 3 - 11）は、無文で口縁部に外面からの焼成前穿孔が 2 孔施された小型の深鉢である。口縁部一部欠損。注記なし。博物館ラベルには「町村農場 墓出土 名取」とある。既報告とは照合できない。

【38442】（図 4 - 12, 図版 3 - 10）は、無文で小型の鉢である。内面および底部外面にわずかに赤彩が見られる。口縁部一部欠損。注記なし。博物館ラベルには「町村農場 墓 名取」とある。既報告とは照合できない。

### 3-1-3. 江別太 1 期に属する資料

江別太 1 期に属する資料は 2 個体である。アヨロ 2b 式に相当する資料を含む。

【34409】(図 4 - 13, 図版 3 - 12) は、アヨロ 2b 式に相当する。器形各部位の屈曲はなく、口縁部内面に明瞭な稜を持つ。底部大半欠損。注記には「4. B」とあり、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 後藤」と記載される。後藤調査ノートとの照合から Tf,T.17 4b の資料と判断される。

【38418】(図 4 - 14, 図版 3 - 13) は、口縁部突起下にキザミ列が垂下し、一部瘤状の貼付が施された深鉢である。胴部下半には縄文施文後の器面研磨が施される。内面積み上げによる凹凸顕著。完形。注記なし。「□□□□ Tf,T.69 2,b」および「江□ 町□農□ □□□□9 □□□b」と記載された後藤ラベル 2 枚のほか、「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」と「江別町村農場出土 後藤」という 2 枚の博物館ラベルが付されている。遠藤・大沼 (1999) 第 15 図右下の拓本と照合でき、後藤の調査による Tf,T.69 2b の資料と判断される。後藤 (1935) 第 2 図の資料であり、千代 (1965) 図 III - 9 もこの個体と推測される。

### 3-2. 続縄文中葉 (江別太 2 期～後北 C<sub>1</sub>期) に属する資料

#### 3-2-1. 江別太 2 期に属する資料

江別太 2 期に属する資料は 9 個体である。

【38396】(図 5 - 1, 図版 4 - 1) は、RL 長条縄文が施され、沈線により X 字状・鋸歯状モチーフが描かれた深鉢である。口縁部突起に対応した 4 単位の文様構成をとる。口縁部一部欠損。底面に「28 3a」と朱筆され、後藤ラベルには「江別兵村 Tf,T.28 □a」、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 後藤寿一」と記載される。注記・ラベルから後藤の調査による Tf,T.28 3a の資料と推測される。『聚英』第十五図版 - 2 の資料であり、遠藤・大沼 (1999) の一覧表に記載がある。

【38423】(図 5 - 2, 図版 4 - 2) は 4 単位の口縁部突起下に粘土紐貼付が施された深鉢である。貼付モチーフは 2 単位ずつ対をなす。口縁部一部欠損。底面に「28 3, b」と朱筆されており、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 後藤寿一」と記載される。注記から、後藤の調査による Tf,T.28 3b の資料と推測される。遠藤・大沼 (1999) の一覧表に記載がある。北広島市教育委員会編 (2002) 写真 9 左、『大観』図版 1150 の資料である。

【34472】(図 5 - 5, 図版 4 - 5) は、4 単位の口縁部突起下に粘土紐貼付が施され、沈線による文様が描かれた深鉢である。貼付モチーフは 2 単位ずつ対をなす。口縁部および底部一部欠損。注記なし。「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」と記載された博物館ラベルが付されるが、後藤 (1935) 第 8 図 - 10 および遠藤・大沼 (1999) 第 21 図上段左の拓本に照合でき、後藤の調査による Tf,T.82 10c の資料と判断される。『大成』図版 160 の資料である。

【39123】(図 5 - 3, 図版 4 - 3) は、4 単位の口縁部突起下に粘土紐貼付が施され、沈線による文様が描かれた深鉢である。完形。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」と記載されるが、後藤ラベルの痕跡が見られる。遠藤・大沼 (1999) 第 21 図上段中央の拓本に照合でき、後藤の調査による Tf,T.82 10h の資料と判断される。

【39256】(図 5 - 4, 図版 4 - 4) は、4 単位の口縁部突起下に粘土紐貼付が施され、沈線による文様が描かれた深鉢である。口縁部・胴部境界内面には軽い稜を持つ。沈線に沿って赤彩される。貼付モチーフは 2 単位ずつ対をなす。口縁部の約 4 分の 1 と底部を欠損する。「41, 2, B」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。後藤ラベルは損傷が激しく「江別兵村 1931, 11, □□□□□□□□」としか確認できない。遠藤・大沼 (1999) の第 8 図上段右の拓本に照合でき、注記からも後藤の調査による Tf,T.41 2b の資料と推測される。『大観』図版 1148 の資料である。

【38412】(図 5 - 6, 図版 4 - 6) は、縄文と浅い沈線・キザミが施された小型の深鉢である。口縁部 5 分の 3 欠損。「Tf,T.3 3A」や「竪穴 3」と注記され、博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」と記載される。注記から後藤の調査による Tf,T.3 3a の資料と判断される。

【34459】(図 5 - 7, 図版 4 - 7) は、4 単位の口縁部突起下に貼付を持つ小型の深鉢である。対をなす 2 箇所の突起下に焼成前穿孔が一孔ずつ施される。完形。「3 3.B」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤」と記載される。注記から後藤の調査による Tf,T.3 3b の資料と推測される。『聚英』第十一図版 - 4 の資料である。

【38409】(図 5 - 8, 図版 4 - 8) は、2 単位の口縁部突起を持つ小型の鉢である。突起下に外面からの焼成前穿孔が 1

孔ずつ施される。口縁部一部欠損。「3 3.C」と注記され、博物館ラベルには「町村農場 墓出土 後藤」と記載される。注記から後藤の調査による T-f,T.3 3c の資料と推測される。既報告とは照合できないが、遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【38429】（図 5 - 9, 図版 4 - 9）は、やや胴部が張る深鉢である。RL 長条縄文のほか沈線・キザミが施され、外面一部赤彩される。口縁部から胴部上半欠損。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」と記載される。既報告とは照合できない。

### 3-2-2. 後北 A 期に属する資料

後北 A 期に属する資料は 13 点である。アヨロ 3a 式に相当する資料を含む。

#### ・古段階

【38392】（図 6 - 1, 図版 5 - 1）は、口縁部に粘土紐貼付が施され、4 単位の口縁部突起下に浅い沈線が垂下する。胴部下半以下欠損。注記なし。「江別町村農場 T-f,T.85 15, g 1933, 11, 5」と「T-f,T.86 85 八誤」という 2 枚の後藤ラベル、さらには「江別兵村 町村農場墳墓 後藤寿一」とする博物館ラベルが付される。ラベルから後藤の調査による T-f,T.86 15g の資料と判断され、遠藤・大沼（1999）第 22 図左の拓本に照合される<sup>6)</sup>。『大成』図版 159 の資料である。

【34456】（図 6 - 2, 図版 5 - 2）は、口縁部に 2 単位の吊耳状貼付を持つ深鉢である。この貼付を含め 4 単位の粘土紐貼付垂下。完形。博物館ラベルには「町村農場 墓出土 後藤」とある。注記は確認できないが、後藤ラベルの痕跡が見られる。既報告とは照合できないが、後藤調査ノートから T-f,T.86 15k の資料と判断される。

【38389】（図 6 - 3, 図版 5 - 3）は、胴部上半に短沈線により逆 V 字状のモチーフが描かれた深鉢である。4 単位の口縁部突起のうち 1 箇所のみが 2 個一対となる。内面積み上げ痕顕著。口縁部一部欠損。「H. NO, 17」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 第 17 号 名取」とある。既報告とは照合できない。

【38430】（図 6 - 4, 図版 5 - 4）は、長条縄文とキザミが施された深鉢である。平底。口縁部約 2 分の 1、底部一部欠損。「NO, 17」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 名取」とある。既報告とは照合できない。

【39254】（図 6 - 5, 図版 5 - 5）は、口縁部突起直下から粘土紐貼付が垂下する深鉢である。内面積み上げ痕顕著。口縁部一部欠損。「NO, 17」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 No17 出土」とある。『大成』図版 194 の資料である。

【39135】（図 6 - 6, 図版 5 - 6）は、4 単位の口縁部突起から粘土紐貼付が垂下する大型の深鉢である。貼付モチーフは 2 単位ずつ対をなす。口縁部内面に RL 斜行縄文が施文される。内面積み上げ痕顕著。口縁部一部欠損。注記なし。3 枚の博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 出土」・「江別兵村 町村農場 墳墓 発掘」、さらには「発掘者 犬飼哲男 名取武光 後藤寿一」とある。『聚英』第十一図版 - 2、名取（1939）第十図 - 1 の資料である。

#### ・新段階

【34412】（図 7 - 1, 図版 6 - 1）は、4 単位の口縁部突起から粘土紐貼付が垂下する深鉢である。貼付モチーフは 2 単位ずつ対をなす。口縁部約 4 分の 1 および底部大半欠損。注記なし。博物館ラベルには「町村農場 墓 名取」とある。既報告とは照合できない。

【38400】（図 7 - 2, 図版 6 - 2）は、口縁部に内面からの焼成前穿孔が施された小型の深鉢である。外面胴部下半やや光沢を呈する。口縁部大半欠損。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」と記載される。注記なし。既報告とは照合できないが、後藤調査ノートから T-f,T.77 3c の資料と判断される。

【38431】（図 7 - 3, 図版 6 - 3）は、4 単位の口縁部突起から V 字状の粘土紐貼付が垂下する深鉢である。斜位および横位の短沈線が全面に施される。底部一部欠損。「T-f,T.6」と朱筆され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤」とある。注記から後藤の調査による T-f,T.6 出土資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【34435】（図 7 - 4, 図版 6 - 4）は、口縁部付近に粘土紐貼付が施され、外面が一部赤彩された深鉢である。胴部上半の赤彩範囲は逆 V 字状を呈する。胴部一部欠損。「T-f,T.66 10c」と朱書きされ、後藤ラベルには「江別 町村農場 T-f,T.66 10, c 1932, 11, 20」と、博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」とある。注記・ラベルから後藤の調査による T-f,T.66 10c の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。千代（1965）図 IV - 6 の資料か。

【39258】（図 7 - 5, 図版 6 - 5）は、胴部がやや張る深鉢である。口縁部わずかに波打つ。胴部一部欠損。「T-f,T.66 10, d」と朱書きされ、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場出土 後藤寿一」とある。注記から後藤の調査による T-f,T.66 10d

の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【34464】（図7-6、図版6-6）は、4単位の口縁部突起を持ち、粘土紐貼付と短沈線列により縦位8単位の器面を区画する。口縁に沿う粘土紐貼付上には、キザミが施されない。完形。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」とある。既報告とは照合できない。

【34470】（図7-7、図版6-7）は、RL長条縄文により、胴部上半に横位の波状モチーフが描かれる。長条縄文によるモチーフには沈線に沿わせる。口縁部には長条縄文縦走後、さらに横走させる。外面縄文施文後の器面研磨なし。アヨロ3a式に相当する。口縁部一部欠損。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 名取」とある。既報告とは照合できない。

### 3-2-3. 後北B期に属する資料

後北B期に該当する資料は20個体である。

#### ・古段階

【34512】（図8-2、図版7-1）は、口縁部付近にのみ粘土紐貼付が施される。口縁部一部欠損。「Tf,T.37 7A」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 後藤寿一」とある。後藤ラベルは剥奪し、末尾の「A」の文字と朱印のみが観察される。注記から後藤の調査によるTf,T.37 7aの資料と判断される。遠藤・大沼（1999）第5図右の資料である。

【34442】（図8-1、図版7-2）は、口縁部付近の粘土紐貼付のみキザミが施された大型の深鉢である。粘土紐貼付は細く断面三角形を呈する。口縁部から胴部上半約5分の1欠損。「Tf,T.37 7ノB」と注記され、博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤寿一」とある。後藤ラベルは確認されないものの、注記から後藤の調査によるTf,T.37 7bの資料と判断される。遠藤・大沼（1999）第5図左の資料である。

【34436】（図8-3、図版7-3）は、胴部上半に煩雑に粘土紐貼付が施され、沈線に沿わせる。口縁部突起の4単位割付がややゆがむ。外面一部剥落あり。「Tf,T.37 7・C」と注記され、博物館ラベルには「江別町村農場 墳墓 後藤」とある。後藤ラベルは確認されないものの、注記から後藤の調査によるTf,T.37 7cの資料と判断される。遠藤・大沼（1999）第6図上段左の資料である。

【34455】（図8-4、図版7-4）は、口縁部にのみ粘土紐貼付が施され、短沈線が一部縦位に垂下する深鉢である。口縁部から胴部上半約3分の2欠損。「Tf,T.37 7□」と注記され、博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」とある。後藤ラベルは確認されないものの、注記および遠藤・大沼（1999）第6図右上の拓本に照合でき、後藤の調査によるTf,T.37 7dの資料と判断される。

【34446】（図8-5、図版7-5）は、口縁部に粘土紐貼付が施され、2単位の吊耳状突起を持つ小型の壺である。胴部一部欠損。「Tf,T.37 7□」と注記され、後藤ラベルには「□□兵村 1931、11、25、Tf,T.□□ □□」、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤」とある。注記から後藤の調査によるTf,T.37出土資料と判断されるが、遠藤・大沼（1999）第5図・第6図に示される同一遺構出土の6個体とは照合できない。後藤調査ノートから7eの資料と判断される。

【34440】（図8-6、図版7-6）は、胴部上半に粘土紐貼付と短沈線が施された深鉢である。口縁部から胴部上半約4分の3欠損。「44 6、2」と注記され、博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」とある。注記および遠藤・大沼（1999）の第9図左上の拓本に照合できることから、後藤の調査によるTf,T.44 6bの資料と判断される。

【39125】（図8-7、図版7-7）は、胴部上半に粘土紐貼付が施された深鉢である。口縁部一部欠損。「50 3. A」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村出土」とある。注記から後藤の調査によるTf,T.50 3aの資料と判断される。遠藤・大沼（1999）第11図左上段、北広島市教育委員会編（2002）写真10左の資料である。

【38394】（図8-8、図版7-8）は、粘土紐貼付と短沈線が施された深鉢である。底部2重の上げ底である。完形。「50 3. B」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。後藤ラベルの痕跡が確認され、注記から後藤の調査によるTf,T.50 3bの資料と判断される。遠藤・大沼（1999）第11図左下段、北広島市教育委員会編（2002）の写真10中央の資料である。

【39255】（図8-10、図版7-9）は、口縁部にのみ粘土紐貼付が施される深鉢である。底部わずかに上げ底。完形。「50 3. C」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。後藤ラベルは確認されないが、注記から後藤の調査によるTf,T.50 3cの資料と判断される。遠藤・大沼（1999）第11図右、北広島市教育委員会編（2002）

写真 10 右の資料である。

【39122】(図 8 - 11, 図版 8 - 1) は、平縁で胴部上半に粘土紐貼付が施される。貼付モチーフは 2 単位ずつ対をなす。底部わずかに上げ底。完形。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」とあるが、遠藤・大沼 (1999) 第 21 図下段左の拓本に照合でき、後藤の調査による T-f,T.83 7b の資料と判断される。

【34467】(図 8 - 9, 図版 8 - 2) は、4 単位の口縁部突起に対応した粘土紐貼付が施される。貼付モチーフの組み合わせが単位ごとにやや異なる。完形。「T-f,T.54. 5, d」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村町村農場墳墓 後藤寿一」とある。後藤ラベルが確認されないものの、注記から後藤の調査による T-f,T.54 5d の資料と判断される。遠藤・大沼 (1999) 第 13 図右上の資料である。

#### ・中段階

【38425】(図 9 - 1, 図版 8 - 3) は、胴部下半に内傾の擬口縁が確認される。胴部下半から底部約 3 分の 2 欠損。注記は底部欠損により「4. A」以前の記載が不明。博物館ラベルには「町村農場 墓出土 後藤」とある。遠藤・大沼 (1999) 第 7 図上段左の拓本に照合でき、後藤ラベルは確認されないものの、注記からも後藤の調査による T-f,T.40 4a の資料と判断される。

【34463】(図 9 - 2, 図版 8 - 5) は、胴部上半に細い粘土紐が煩雑に貼りつけられ、貼付上に細かくキザミが施された深鉢である。口縁部突起は 2 個一対ものと 1 個のものが 2 単位ずつ対をなす。口縁部・底部一部欠損。「T-f,T.59 2.a」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。後藤ラベルは確認されないものの、注記から後藤の調査による T-f,T.59 2a の資料と判断される。遠藤・大沼 (1999) の一覧表に記載がある。

【34432】(図 9 - 3, 図版 8 - 4) は、胴部上半に太い粘土紐が貼り付けられ、貼付上にキザミが施された深鉢である。口縁部一部欠損。「T-f,T.59 2B」と注記され、2 枚の博物館ラベルに「江別兵村 町村農場 後藤寿一」「江別口田山 出土 後藤」とある。後藤ラベルは確認されないものの、注記から後藤の調査による T-f,T.59 2b の資料と判断される。遠藤・大沼 (1999) の一覧表に記載がある。高倉 (1958 : 17 頁) の写真および後藤 (1934) 第 2 図 - 2 の資料である。

【34408】(図 9 - 4, 図版 8 - 7) は、2 個一対の口縁部突起を 4 単位有する。刺突にはササクレ痕が観察される。口縁部から底部約 3 分の 1 欠損。今回部分的に石膏入れを行った。注記・ラベル等なし。既報告とは照合できない。

【38444】(図 9 - 5, 図版 8 - 6) は、粘土紐貼付に沿い沈線が施される。短沈線にはササクレ痕が観察される。胴部下半の長条縄文は手ずれによるものか不明瞭である。口縁部から胴部約 4 分の 1 欠損。今回部分的に石膏入れを行った。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村町村農場 墳墓 名取」とある。既報告とは照合できない。

#### ・新段階

【38427】(図 9 - 6, 図版 9 - 1) は、粘土紐貼付間が明瞭に赤彩される。口縁部約 2 分の 1 および胴部一部欠損。注記なし。2 枚の博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」、さらに「朱は後人が濃化したもの」とある。ラベルの記載からすると、赤彩自体は元々されていたものと推測される。既報告とは対照できない。

【34411】(図 9 - 7, 図版 9 - 2) は、胴部上半に粘土紐貼付が施され、キザミを密に充填する。口縁部突起 2 個一対で 4 単位となる。口縁部から胴部約 5 分の 2、底部欠損。注記なし。博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」とある。既報告とは照合できないが、後藤調査ノートから T-f,T.82 10b と判断される。

【34466】(図 10 - 1, 図版 9 - 3) は、粘土紐貼付上のキザミが口縁部付近には施されない。口縁部および底部一部欠損。「48 4, A」と注記され、後藤ラベルには「江別兵村 1931, 11, 15 T-f,T.48 4A」、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。注記および後藤ラベルから後藤の調査による T-f,T.48 4a の資料と判断される。遠藤・大沼 (1999) の一覧表に記載がある。

【34465】(図 10 - 2, 図版 9 - 4) は 2 条ないし 3 条一組の微隆起貼付により、胴部上半に弧状モチーフを密に描く。モチーフ間に細かいキザミを充填する。口縁部約 3 分の 1 欠損。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 名取」とある。既報告とは照合できない。

### 3-2-4. 後北 C<sub>1</sub>期に属する資料

後北 C<sub>1</sub>期に属する資料は 35 個体である。

#### ・古段階

【38407】(図 10 - 4, 図版 9 - 5) は、外面が全面赤彩された吊耳壺である。底部外面がやや張り出す。微隆起貼付に

は鉛色を呈する明らかに異なった粘土を使用している。口縁部一部欠損。底部外面には「古墳付近 竪穴様墳墓 A 壽」という墨書、その上に重ねて「Tf,T.A 2A」と朱書きされる(図版 1-1)。博物館ラベルには「江別兵村出土 後藤寿一」とあり、後藤ラベルの痕跡が確認される。注記から後藤の調査による Tf,T.A 2a の資料と判断される。遠藤・大沼(1999)の一覧表に記載がある。

【34468】(図 10-5, 図版 9-6) は、外面が赤彩された深鉢である。口縁部一部欠損。底部外面には「竪穴様墳墓 A」という墨書、その上に重ねて「Tf,T.A 2B」と朱書きされる。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とあり、後藤ラベルの痕跡が確認される。注記から後藤の調査による Tf,T.A 2b の資料と判断される。遠藤・大沼(1999)の一覧表に記載がある。

【34457】(図 10-3, 図版 9-7) は、4 単位の口縁部突起に対応した文様割付が見られる小型の深鉢である。完形。「Tf,T.B」と注記され、博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」とある。注記から、後藤の調査による Tf,T.B 出土資料と判断される。遠藤・大沼(1999)の一覧表に記載がある。

【34469】(図 10-6, 図版 10-1) は、2 個一対の口縁部突起を 4 単位有する大型の深鉢である。微隆起貼付により縦位 8 単位の器面区画し、胴部上半に短沈線列が垂下する。円形刺突列が横位に施される。胴部・底部一部欠損。注記なし。後藤ラベルには「江別兵村 Tf,T.78 土器 11・a 1933、4、30」、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。ラベルから後藤の調査による Tf,T.78 11a の資料と判断される。遠藤・大沼(1999) 第 17 図左の資料である。

【39257】(図 10-7, 図版 10-2) は、口縁部にのみ微隆起貼付が施された深鉢である。底部欠損。注記なし。後藤ラベルには「江別兵村 □□T.78 □□11、b □□33、4 30」、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。ラベルから後藤の調査による Tf,T.78 11b の資料と判断される。遠藤・大沼(1999) 第 17 図右上の資料である。

【38434】(図 11-1, 図版 10-3) は、小型の深鉢である。口縁部一部欠損。注記なし。後藤ラベルが付されているものの、損傷が激しく、調査年の「1933」が読み取れるのみである。博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」とある。ラベルから後藤の調査による出土資料と判断される。遠藤・大沼(1999) 第 17 図右下の拓本に照合でき、Tf,T.78 11d の資料と推定される。

【34452】(図 11-2, 図版 10-4) は、微隆起貼付に沿い赤彩された小型の深鉢である。口縁部から胴部約 3 分の 1 欠損。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤」とある。後藤ラベル等は確認されないが、遠藤・大沼(1999) 第 18 図左上の拓本に照合でき、後藤の調査による Tf,T.78 11e の資料と推定される。

【34473】(図 11-3, 図版 10-5) は、微隆起貼付によるモチーフに沿い赤彩された深鉢である。胴部上半は縦位 4 単位の区画され、微隆起貼付による菱形モチーフが充填される。モチーフは小さく 2 つのものと大きく 1 つのものが 2 単位ずつ対をなす。大きく菱形が描かれる単位には、底部付近にも微隆起貼付が施される。胴部一部欠損。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」とある。ラベルに名取調査とあるが、遠藤・大沼(1999) 第 18 図中央下の拓本に照合でき、後藤の調査による Tf,T.78 11f の資料と推定される。

【38406】(図 11-5, 図版 10-6) は、口縁部に補修孔が一对施された深鉢である。底部一部欠損。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤」とある。後藤ラベル等は確認されないが、遠藤・大沼(1999) 第 18 図右上の拓本に照合でき、後藤の調査による Tf,T.78 11g の資料と推定される。

【38415】(図 11-4, 図版 10-7) は、器面区画の基点に微隆起貼付により円形モチーフが描かれた深鉢である。胴部一部欠損。注記なし。後藤ラベルには「江別兵村 □□33 □□30 T□□78□□11、g」、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。ラベルから、後藤の調査による Tf,T.78 11g の資料と推定される。遠藤・大沼(1999) 第 19 図左の資料である。

【38403】(図 11-6, 図版 11-1) は、微隆起貼付上にキザミが施された深鉢である。口縁部約 5 分の 1 欠損。底部外面に「78」と注記される。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。後藤ラベル等は確認されないが、遠藤・大沼(1999) 第 19 図右の拓本に照合でき、注記からも後藤の調査による Tf,T.78 11h の資料と推定される。

【34450】(図 11-7, 図版 11-2) は、口縁部から胴部上半約 2 分の 1 を欠損した深鉢である。今回石膏復元を行った。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」とある。既報告とは照合できないが、後藤調査ノートから Tf,T.78 11h の資料と判断される。

【38416】(図 12-1, 図版 12-1) は、微隆起貼付のモチーフに沿い赤彩される大型の吊耳壺である。底部 2 重の上げ底。完形。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 名取」とある。法量や 2 重の上げ底・赤彩といった特

微や、同一遺構出土資料を撮影したと思われるガラス乾板（整理番号 6M - 12）から、名取（1933）の「第五号墳墓」の土器 a と推測される。『大成』図版 223 の資料である。

【38419】（図 12 - 5, 図版 12 - 2）は、口縁の一端が片口となる吊耳壺である。底部 2 重の上げ底。微隆起貼付のモチーフに沿い赤彩。摩滅激しい。完形。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 名取」とある。名取（1933）第七図左手前<sup>7)</sup>、図版 I - 8 に照合でき、「第五号墳墓」の土器 b と判断される。名取（1939）第十図 - 3 の資料である。

【38390】（図 12 - 4, 図版 12 - 3）は、口縁の一端が片口となる吊耳壺である。底部 2 重の上げ底。微隆起貼付のモチーフに沿い赤彩。摩滅激しい。RL 長条縄文により、微隆起貼付以前に器面を縦位に区画している。口縁部約 4 分の 1 欠損。「H - IV - 3」と注記され、博物館ラベルには「町村農場 墓 名取」とある。名取（1933）第七図右手前の個体に照合でき、法量や片口・吊耳壺・2 重の上げ底・赤彩といった特徴からも「第五号墳墓」の土器 c と判断される。

【39142】（図 12 - 2, 図版 12 - 4）は、胴部半ばが強く張る吊耳壺である。胴部内面が一部赤彩される。口縁部一部欠損。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 出土」とある。名取（1933）第七図左奥の個体に照合でき、法量や片口・吊耳壺・2 重の上げ底・赤彩といった特徴からも「第五号墳墓」の土器 d と判断される。『美術』図版 221 の資料である。

【39136】（図 12 - 3, 図版 12 - 5）は、微隆起貼付によるモチーフ内と、胴部下半・底部上げ底内が横位に赤彩された深鉢である。3 個一対と 2 個一対の口縁部突起が 2 単位ずつ対をなす。貼付モチーフの空隙にはやや横長の原体による刺突列が施される。完形。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場出土 墳墓 発掘」とある。名取（1933）第七図右奥の個体に照合でき、「第五号墳墓」の土器 f と判断される。『美術』図版 222、『大成』図版 204、『大観』図版 1157 の資料である。

【39121】（図 12 - 6, 図版 12 - 6）は、口縁の一端が片口となる深鉢で、片口と反対側に 3 個一対の口縁部突起を有する。完形。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 名取」とある。法量や片口といった特徴、同一遺構出土資料を撮影したと思われるガラス乾板（整理番号 6M - 12）から、名取（1933）第五号墳墓の土器 i と判断される。

【39120】（図 13 - 1, 図版 11 - 5）は、外面すべてに微隆起貼付が施された片口壺である。魚籠型と呼ばれた特殊な器形である。片口部の反対側は肥厚し、貫通孔が施される。完形。注記なし。博物館ラベルには「町村農場 江別兵村 墳墓 出土」とある。名取（1933）図版 I - 9 および第十二図 - 3 と照合でき、「第四号墳墓」の土器 a と推定される。名取（1939）第十図 - 5、『大成』図版 172 の資料である。

【39129】（図 13 - 2, 図版 11 - 3）は、外面が全面赤彩された深鉢である。微隆起貼付によるモチーフ間には、円形の刺突が施される。ほぼ平底で、底部外面がやや張り出し、RL 長条縄文が施文される。口縁部一部欠損。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。既報告とは照合できないが、後藤調査ノートから T.f,T.89 3A の資料と判断される。

【38420】（図 13 - 3, 図版 11 - 4）は、外面が全面赤彩された深鉢である。微隆起貼付によるモチーフ間には、爪形のキザミの他、三角形の刺突が充填される。平底。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」とある。既報告とは照合できないが、後藤調査ノートから T.f,T.89 3b の資料と判断される。

#### ・中段階

【39126】（図 14 - 1, 図版 13 - 1）は、微隆起貼付によるモチーフの空隙に横位の沈線が施された深鉢である。炭化物顕著に付着。口縁部および底部一部欠損。「T.f,T.63 26b」と注記される。ラベルなし。注記から、後藤の調査による T.f,T.63 26b の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。『大成』図版 203 の資料である。

【34431】（図 13 - 4, 図版 13 - 2）は、器形全体が斜めにゆがむ大型の深鉢である。このゆがみは土器成形後の乾燥段階で生じたものと思われる。ほぼ平底。口縁部約 4 分の 1 欠損。「T.f,T.63 26.C」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。注記から後藤の調査による T.f,T.63 26c の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある<sup>8)</sup>。

【34441】（図 13 - 5, 図版 13 - 3）は、大型の深鉢である。ほぼ平底。胴部一部欠損。今回破片の接合および石膏入れを行った。「T.f,T.63 26.Ĉ」と注記され、後藤ラベルには「江別町村農場 T.f,T.63 26.Ĉ 1932,11.13」、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 後藤寿一」とある。注記・ラベルから、後藤の調査による T.f,T.63 26 ê の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。『大成』図版 201 の資料である。

【34448】（図 14 - 2, 図版 13 - 4）は、口縁部に 2 孔穿孔が施された小型の深鉢である。口縁部一部剥落。底部欠損。

「Tf,T.63 26.□」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 後藤寿一」とある。注記から、後藤の調査による Tf,T.63 出土資料と判断される。遺物番号は判読できないが、他の資料との関係から 26f の資料と推測される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【34406】（図 14 - 3, 図版 13 - 5）は、底部が 3 重の上げ底となる深鉢である。完形。注記なし。後藤ラベルには「江別町村農場 Tf,T.63 26g」、博物館ラベルには「江別兵村農場（町村）墳墓 後藤寿一」とある。ラベルから後藤の調査による Tf,T.63 26g の資料と判断される。後藤（1935）第 10 図 - 17 の資料である。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【38422】（図 14 - 4, 図版 14 - 1）は、底部がほぼ平底となる深鉢である。文様割付は 4 単位を基本とするが、微隆起貼付によるモチーフの組み合わせが単位ごとにやや異なる。口縁部および胴部下半一部欠損。「Tf,T.63 26.g」と注記され、博物館ラベルには「町村農場墓 後藤寿一」とある。注記からは後藤の調査による Tf,T.63 26g の資料と判断されるが、【39137】と記載が重複する。『大成』図版 208 の資料である。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【39137】（図 14 - 5, 図版 14 - 2）は、胴部上半の微隆起貼付や胴部下半の長条縄文に沿い赤彩された深鉢である。外面一部剥落。「Tf,T.63 26. g」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。注記からは後藤の調査による Tf,T.63 26g の資料と判断されるが、【38422】と記載が重複する。『大成』図版 205 の資料である。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【39119】（図 14 - 6, 図版 14 - 3）は、通常微隆起貼付により描かれるモチーフが沈線に代替された深鉢である。胴部上半斜行縄文施文。沈線・刺突内に赤彩が見られる。摩滅が顕著であり、元来は外面全体が赤彩されていたものと推測される。口縁部・胴部一部欠損。「Tf,T.63. 26h」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。注記から、後藤の調査による Tf,T.63 26h の資料と判断される。『聚英』第十四図版 - 2、『大成』図版 207、『大観』図版 1158 の資料である。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【34407】（図 14 - 7, 図版 14 - 4）は、微隆起貼付に沿い赤彩された深鉢である。胴部一部欠損。外面剥落あり。「Tf,T.63 26. h」と注記され、博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」とある。注記から、後藤の調査による Tf,T.63 26h の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【34437】（図 14 - 8, 図版 14 - 5）は、微隆起貼付に沿い沈線が施され、一部赤彩された小型の深鉢である。ほぼ平底。口縁部一部欠損。「Tf,T.63.26,i」と注記され、後藤ラベルには「江別町村農場 Tf,T.63 26.i □□□□□□」、博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」とある。注記・ラベルから、後藤の調査による Tf,T.63 26i の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【38395】（図 14 - 10, 図版 14 - 7）は、微隆起貼付に沿い赤彩された深鉢である。口縁部突起下瘤状の貼付。外面一部剥落。「Tf,T.63.26. j」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。後藤ラベルの痕跡が見られる。注記から後藤の調査による Tf,T.63 26j の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【38391】（図 14 - 9, 図版 14 - 6）は、深鉢である。外面一部剥落。摩滅激しい。「Tf,T.63.26. K」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村町村農場 墳墓 後藤」とある。注記から、後藤の調査による Tf,T.63 26k の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【38393】（図 15 - 1, 図版 15 - 1）は、4 単位の口縁部突起が大小 2 箇所ずつ対をなす壺である。完形。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村町村農場墳墓出土 名取」とある。『大成』図版 221 の資料である。

【38432】（図 15 - 2, 図版 15 - 3）は、小型の深鉢である。口縁部一部欠損。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村町村農場 墳墓 後藤」とある。既報告とは照合できない。

### 3-3. 続縄文後葉（後北 C<sub>2</sub>-D 期～円形・刺突文土器群期）に属する資料

#### 3-3-1. 後北 C<sub>2</sub>-D 期に属する資料

後北 C<sub>2</sub>-D 期に属する資料は 31 個体である。

##### ・古段階

【34449】（図 15 - 3, 図版 15 - 2）は、口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文と微隆起貼付・刺突による文様が施される。長条縄文による器面の区画・弧状モチーフの構成がやや乱れる。貼付は元々の粘土紐がためて粗雑であ



る。刺突は、モチーフの空隙に充填するという本来的な施文原則からやや逸脱している。外面胴部下半ケズリ痕。口縁部から胴部一部欠損。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」とある。既報告とは照合できない。

【38443】(図 16-1, 図版 15-4) は、RL 長条縄文と微隆起貼付による文様が施される。2 単位の菱形モチーフが描かれる。底部成形時のゆがみにより一部上げ底状を呈する。外面炭化物顕著に付着。口縁部から胴部上半欠損。「□バツ 竪穴 名取」と注記される。既報告とは照合できない。

【34451】(図 16-2, 図版 15-5) は、平縁の深鉢である。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文と微隆起貼付・刺突による文様が施される。長条縄文により口縁部突起に対応した縦位 4 単位の器面区画が行われ、2 単位ずつ対となる文様構成をとる。補修孔一対。口縁部および胴部下半一部欠損。「MACHIMURA FARM H20 P、1」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 第 20 号墳墓 名取」とある。既報告とは照合できない。

【39143】(図 16-3, 図版 15-6) は、注口皿である。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。外面全面に RL 長条縄文・微隆起貼付・刺突による文様が施され、長条縄文の文様モチーフに沿って赤彩される。注口上部にはスリットが施される。微隆起貼付には鉛色粘土を使用している。内面平滑。注口端部・口縁部一部欠損<sup>9)</sup>。「MACHIMURA FARM H、NO、19 P.1」と注記され、2 枚の博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓出土」「江別出土 名取」とある。『美術』図版 223、『大成』図版 182 の資料である。

【14351・25008】(図 16-4, 図版 15-7) は、注口鉢である。注口上部にスリットが施され、口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文と微隆起貼付・刺突による文様が施される。底部外面にも文様施文。内面粘土帯積み上げによる凹凸顕著。器形の約 5 分の 4 欠損。「MACHIMURA FARM H-NO 19 P2」と注記され、博物館ラベルには「町村農場 墓 (19 号) 名取」とある。既報告とは照合できない。

【38413】(図 17-1, 図版 16-1) は、口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文により、口縁部突起に対応した 4 単位の文様が施される。口縁部わずかに欠損。「E・M・F □ 名取」と注記され、博物館ラベルには「町村農場 江別兵村 墳墓 名取」とある。名取 (1933) 図版 I-4 に照合でき、「第六号墳墓」の土器 a と判断される。名取 (1939) 第十図-4、『大成』図版 227、『大観』図版 1168 の資料である。

【34660】(図 17-2, 図版 16-2) は、口径に比べ器高が低い深鉢である。底部が張り出し、外面には粘土帯積み上げによる凹凸が目立つ。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文による文様が施される。長条縄文により縦位 5 単位の器面区画が行われる。補修孔一対。口縁部わずかに欠損。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」とある。既報告とは照合できない。

【38411】(図 17-3, 図版 16-3) は、口唇部は尖り、内傾面を持つ。口縁部粘土紐貼付なし。RL 長条縄文と刺突による文様が施される。2 単位の菱形モチーフが描かれる。口縁部および底部一部欠損。石膏復元が行われている。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墓」とある。調査者不明。既報告とは照合できない。

#### ・中段階

【34397】(図 17-4, 図版 17-1) は大型の深鉢である。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文と微隆起貼付・刺突による文様が施される。口縁部突起に対応した縦位 4 単位の文様構成。長条縄文と微隆起貼付によるモチーフに沿って、部分的に赤彩が確認される。外面胴部下半にケズリの痕跡。土圧によるものか、器形全体がゆがむ。全体の約 5 分の 3 欠損。今回破片の接合・石膏復元を行った。注記なし。後藤ラベルには「江別町村農場 T.f.T.70 8, a 1933, 4, 16」とある。ラベルから後藤の調査による T.f.T.70 8a の資料と判断される。遠藤・大沼 (1999) の一覧表に記載がある。

【39253】(図 17-6, 図版 17-3) は、口縁部に補修孔が施された深鉢である。平縁。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文による文様が施される。後藤ラベルは欠損が激しく、「□□□□□□□ □□□7□ S□□ 193□ □ □ 10」と確認されるのみである。博物館ラベルなし。遠藤・大沼 (1999) 第 16 図左の拓本に照合でき、後藤の調査による T.f.T.70 8b の資料と判断される。『大成』図版 228 の資料である。

【34438】(図 17-5, 図版 17-2) は、底部に内面からの焼成前穿孔が 2 孔施された鉢である。口縁部粘土紐貼付なし。RL 長条縄文と微隆起貼付・刺突による文様が施される。口縁部一部欠損。注記なし。博物館ラベルには「兵村 町村農場 墓 後藤」とある。既報告とは照合できないが、後藤調査ノートから T.f.T.70 8d の資料と判断される。

【34491】(図 18-1, 図版 16-4) は注口深鉢で、注口部とその反対側に口縁部突起を持つ。両者の中間点にはやや大きめのキザミが施される。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文と刺突による文様が施される。長条縄文により縦位 4 単位の器面を区画し、注口部を基点とした 2 単位の文様構成をとる。注口部の一部、底部を欠損する。注記な

し。後藤ラベルには「江別町村農場 T.f.T. □□ 5□ □□□□」、博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」とある。ラベルおよび北広島市教育委員会編（2002）写真 11 下段右の個体に照合できることから、後藤の調査による T.f.T.71 5a の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【34490】（図 18 - 2, 図版 16 - 5）は、注口鉢で、注口部とその反対側に口縁部突起を持つ。注口部は棒状工具により、内面から焼成前に穿孔を行うことで形成されている。その上部には注口と直交方向の穿孔がなされ、把手状を呈する。底部高台状を呈し、内面から焼成後に穿孔が行われている。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文による文様が施される。注記なし。後藤ラベルの痕跡が確認され、博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」とある。ラベルの痕跡から後藤調査資料と判断され、北広島市教育委員会編（2002）の写真 11 上段右の個体に照合できることから、後藤の調査による T.f.T.71 5b の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【34462】（図 18 - 3, 図版 16 - 6）は、4 単位の口縁部突起を持つ深鉢である。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文による文様が施される。口縁部突起に対応した 4 単位の文様構成をとる。底部一部欠損。「□□□□□ □5, C □□□3」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 墓」とある。後藤（1935）第 17 図 - 23、遠藤・大沼（1999）第 16 図中央の拓本に照合でき、後藤の調査による T.f.T.71 5c の資料と判断される。

【38398】（図 18 - 4, 図版 16 - 7）は、口縁部突起の 1 箇所が把手状となる深鉢である。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文と刺突による文様が施される。長条縄文により口縁部突起に対応した縦位 4 単位の器面区画を行い、2 単位ずつ対になる文様構成をとる。口縁部一部欠損。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤」とある。既報告とは照合できないが、後藤調査ノートから T.f.T.74 出土資料と判断される。

【38424】（図 18 - 7, 図版 17 - 6）は、赤彩された深鉢である。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。口縁部突起は 2 個一対と 1 個のみのものが 2 箇所ずつ対をなし、これに対応し胴部上半の文様モチーフも 2 単位ずつ対になる。RL 長条縄文と微隆起貼付・刺突による文様が施される。赤彩は口縁部突起下と突起の中間部には底部付近にまで（縦位 8 単位）、さらにそれらの中間部では胴部上半のみという原則が見られる。底部外面の赤彩は胴部に対応するようである。口縁部 3 分の 1 欠損。注記なし。博物館ラベルには「町村農場 墓 名取」とある。既報告とは照合できないが、後藤調査ノートから T.f.T.107 7c の資料と判断される。

【38426】（図 18 - 5, 図版 17 - 4）は、無文で赤彩が施された注口鉢である。注口上部にのみキザミを有する 5 条の粘土紐貼付が施される。内面には注口成形時の粘土帯接合痕が見られる。口縁部わずかに欠損。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。北広島市教育委員会編（2002）写真 12 中央の個体に照合できることから、後藤の調査による T.f.T.107 7c の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。後藤（1935）第 17 図 - 25、『大成』図版 243 の資料である。

【38401】（図 18 - 6, 図版 17 - 5）は、赤彩された片口鉢である。片口部には外面からの焼成前穿孔が 2 孔施される。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文による文様が施される。口縁部一部欠損。注記なし。博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」とある。北広島市教育委員会編（2002）写真 12 右の個体に照合できることから、後藤の調査による T.f.T.107 7d の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【38410】（図 19 - 1, 図版 18 - 1）は片口鉢である。平縁。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文と刺突による文様が施される。片口に対応した 2 単位の文様構成をとる。片口部一部欠損。注記なし。博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」とある。既報告とは照合できないが、後藤調査ノートから T.f.T.80 2b の資料と判断される。

【34458】（図 19 - 3, 図版 18 - 2）は、底部に外面から焼成後穿孔が行われた把手鉢である。やや上げ底。口縁部粘土紐貼付なし。RL 長条縄文と微隆起貼付・刺突による文様が施される。口縁部一部欠損。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村墳墓 後藤寿一」とある。既報告とは照合できないが、後藤調査ノートから T.f.T.81 12a の資料と判断される。

【38652】（図 19 - 2, 図版 18 - 3）は、口縁部に把手状突起を有し、それに対応した 2 単位の文様構成をとる。把手状突起は、器壁成形後に二つ折りにした粘土紐を接合することにより作成されている。口縁部粘土紐貼付なし。RL 長条縄文と微隆起貼付・刺突による文様が施される。口縁部・底部一部欠損。注記の痕跡あり。ラベルなし。後藤（1935）第 17 図 - 24 に照合でき、遠藤・大沼（1999）の一覧表の記載から、後藤の調査による T.f.T.81 12b の資料と判断される。

【39127】（図 19 - 4, 図版 18 - 4）は、注口深鉢である。注口部は強く上向きとなる。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文と微隆起貼付・刺突による文様が施される。長条縄文により、口縁部突起に対応した縦位 4 単位の器面区画が見られ、注口に対応した 2 単位の文様構成をとる。内面には注口成形の粘土帯接合痕が見られる。「1933 - 4 E

- M - F - H - V 江別町村 □ NATORI」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」とある。法量や注口といった特徴から、名取（1933）の「第七号墳墓」の土器 a に相当するか。

【38428】（図 19 - 5, 図版 18 - 5）は、口縁部に把手状突起を有する。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文と微隆起貼付・刺突による文様が施される。長条縄文により、口縁部突起に対応した縦位 4 単位の器面区画が見られ、2 単位ずつ対になる文様構成をとる。口縁部一部欠損。注記なし。2 枚の博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 出土（後藤）」「NO. 9」とある。既報告とは照合できないが、後藤調査ノートから Tf,T.91 2a の資料と判断される。

【39128】（図 19 - 6, 図版 18 - 6）は、注口上部のみわずかに欠損する極めて遺存状態の良い注口深鉢である。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文と微隆起貼付・刺突による文様が施される。長条縄文により、口縁部突起に対応し縦位 4 単位の器面区画され、2 単位ずつ対になる文様構成をとる。「1933 - 4 E - M - F - H - VII 江別町村 B. NATORI」と注記される<sup>10)</sup>。ラベルなし。名取（1933）図版 I - 3 に照合でき、「第八号墳墓」の土器 b と判断される。名取（1939）第十図 - 6、『美術』図版 219、『大成』図版 239 の資料である。

【38397】（図 19 - 7, 図版 18 - 8）は、注口深鉢である。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文と微隆起貼付・刺突による文様が施される。長条縄文により口縁部突起に対応した縦位の器面区画を行い、2 単位ずつ対になる文様構成をとる。微隆起貼付には赤色の粘土を使用。注口上部に焼成前穿孔 1 孔。内外面炭化物顕著に付着。内面に「No. 4」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 発掘」とある。既報告とは照合できないが、注記から名取調査資料と推測される。

【38414】（図 20 - 1, 図版 18 - 7）は、やや口径が広い深鉢である。2 単位の口縁部突起を持つ。底部はやや張り出し、外端が反る。胴部下半にケズリが施されており、器壁は薄い。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文による文様が施される。土圧によるものか、器形ゆがむ。口縁部から胴部大きく欠損。今回破片の接合・石膏復元を行った。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 名取」とある。既報告とは照合できない。

#### ・新段階

【34405】（図 20 - 2, 図版 19 - 1）は、深鉢である。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文による文様が施される。外面胴部下半にはケズリが施される。口縁部から胴部を大きく欠損する。「Tf,T.61 4b」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。注記から後藤の調査による Tf,T.61 4b の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【34443】（図 20 - 5, 図版 19 - 2）は、深鉢である。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。胴部にかすかに RL 長条縄文が施される。土圧によるものか器形ややゆがむ。口縁部から胴部 5 分の 2 欠損。今回破片の接合と石膏復元を行った。「Tf,T.61 4.c」と注記され、博物館ラベルには「町村農場 墓 後藤」とある。後藤ラベルと思われる痕跡が見られる。注記から後藤の調査による Tf,T.61 4c の資料と判断される。遠藤・大沼（1999）の一覧表に記載がある。

【38402】（図 20 - 3, 図版 19 - 3）は、口縁部突起が大小 2 箇所ずつ対になる深鉢である。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文と微隆起貼付・刺突による文様が施され、外面被熱による摩滅激しい。口縁部から胴部約 3 分の 1 欠損。「EBETSU NO. 16」と注記され、博物館ラベルには「町村農場 墓 第 16 号 出土 名取」とある。既報告とは照合できない。

【38399】（図 20 - 4, 図版 19 - 4）は、胴部下半にかすかに RL 長条縄文が施された鉢である。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。器壁・底部やや厚手。底部外面に粘土帯接合痕が見られる。口縁部 2 分の 1 欠損。注記なし。博物館ラベルには「町村農場 墓 名取」とある。既報告とは照合できない。

【34410】（図 20 - 6, 図版 19 - 5）は、注口部を欠損した深鉢である。口縁部キザミを持つ粘土紐貼付 1 条。RL 長条縄文による文様が施される。口縁部付近、炭化物顕著に付着。「Tf,T. 162」と注記され、博物館ラベルには「江別兵村 町村農場 墳墓 後藤寿一」とある。注記から後藤の調査による出土資料と判断されるが、後藤の調査遺構は Tf,T.123 までであり、番号は誤記と思われる。

### 3-3-2. 円形・刺突文土器群期に属する資料

円形・刺突文土器群期に属する資料は 1 個体のみである。

【39138】（図 20 - 7, 図版 19 - 6）は、無文の片口鉢である。片口部の反対側に 2 個一対の口縁部突起を有する。上面観は非多角形を呈する。最終調整は内外面とも縦位のヘラミガキである。注記なし。博物館ラベルには「江別兵村 町村

農場墳墓出土」とある。名取（1939）第十図 - 9、『大成』図版 254 の資料である。厳密な時期比定は難しいが、円形・刺突文土器群期Ⅴ期～Ⅸ期に相当するか。

### 3-4. 擦文期に属する資料

擦文期に属する資料は少ない。4 個体である。

【34430】（図 20 - 8, 図版 19 - 7）は、頸部に段を持ち、口縁部に横位の沈線が施された長胴甕である。最終調整は内外面ともハケ目調整である。口縁部約 2 分の 1 欠損。「MAT.FA T.F.1」と注記され、「町村農場 竪穴出土 名取」と書かれたラベルが付されている。既報告とは照合できない。

【39250】（図 20 - 9, 図版 19 - 8）は、体部半ばよりやや下位に段を持つ坏である。最終調整は内外面ともヘラミガキで、外面段より下位にはハケ目が観察される。内黒。底部厚い。口縁部から体部約 5 分の 2 欠損。「Machimura Farm T.P.2」と内面に注記され、「町村農場 竪穴出土 名取」と書かれたラベルが付されている。既報告とは照合できない。

【39252】（図 20 - 10, 図版 19 - 9）は、無段でやや小型の坏である。最終調整は内外面ともヘラミガキである。内黒。口縁部から体部約 5 分の 2 欠損。「町村農場 包含層出土 名取」と書かれたラベルが付されている。既報告とは照合できない。

【34434】（図 20 - 11, 図版 19 - 10）は、沈線により鋸歯状モチーフが描かれた無段で内黒の坏である。最終調整は内外面ともヘラミガキである。口縁部から体部一部欠損。今回破片の接合と石膏入れを行った。「EBETSU MACHIMURA H - □□ 193□□□□□□□」<sup>1)</sup>と注記され、ラベルには「江別兵村 町村農場墳墓 名取」とある。名取（1933）図版 I - 11 の資料であり、報告の法量値とは若干差異があるものの、名取の調査による「第二号墳墓」出土資料と特定される。『聚英』第二十九図版 - 2、名取（1939）第 16 図左、高倉（1958 : 18 頁）最上段の資料である<sup>1)</sup>。

## 4. 資料の出土遺構および共伴関係

以上個別に資料を提示した。中には出土遺構や共伴関係が判明したものもある。やや記載内容が重複するが、これらを改めて整理する。以下調査者・遺構別に記載を進める。

### 4-1. 後藤寿一調査資料

T-f,T.A からは土器 2 個体が出土。どちらも植物園で確認される。2a【38407】・2b【34468】である（図 10 - 4・5）。後北 C 期の一括資料である。

T-f,T.B からは土器 1 個体が出土。植物園で確認される。【34457】（図 10 - 3）である。後北 C 期。

T-f,T.3 からは土器 3 個体が出土。全点が植物園で確認される。3a【38412】・3b【34459】・3c【38409】である（図 5 - 6～8）。江別太 2 期の一括資料である。

T-f,T.6 からは土器 1 個体が出土。植物園で確認される。【38431】（図 7 - 3）である。後北 A 期。

T-f,T.17 からは土器 4 個体が出土。うち 1 個体 4b【34409】（図 4 - 13）が植物園で確認される。江別太 1 期。

T-f,T.28 からは土器 3 個体が出土。うち 2 個体が植物園で確認される。3a【38396】・3b【38423】である（図 5 - 1・2）。残りの 3c は遠藤・大沼（1999）の第 4 図右下に拓本が掲載される。江別太 2 期の一括資料である。

T-f,T.37 からは土器 7 個体が出土。うち 5 個体が植物園で確認される。7a【34512】・7b【34442】・7c【34436】・7d【34455】・7e【34446】である（図 8 - 1～5）。残りの 7c・7f は遠藤・大沼（1999）の第 6 図に拓本が掲載される。後北 B 期の一括資料である。

T-f,T.40 からは土器 4 個体が出土。うち 1 個体 4a【38425】（図 9 - 1）が植物園で確認される。残りの個体は遠藤・大沼（1999）の第 7 図に掲載される。後北 B 期の一括資料である。

T-f,T.41 からは土器 2 個体が出土。うち 1 個体 2b【39256】（図 5 - 4）が植物園で確認される。他 1 個体 2a は遠藤・大沼（1999）の第 8 図に拓本が掲載される。江別太 2 期の一括資料である。

T-f,T.44 からは土器 6 個体が出土。うち 1 個体 6b【34440】（図 8 - 6）が植物園で確認される。残りの個体のうち 6a

以外は遠藤・大沼(1999)の第9図・第10図に拓本が掲載され、6Eは旭川市博物館の所蔵が確認される(『旭博目』1320)。後北B期の一括資料である。

Tf,T.48からは土器4個体が出土。うち1個体4a【34466】(図10-1)が植物園で確認される。残りの個体のうち4bは旭川市博物館の所蔵が確認される(『旭博目』1096)。後北B期の一括資料である。

Tf,T.50からは土器3個体が出土。全個体が植物園で確認される。3a【39125】・3b【38394】・3c【39255】である(図8-7・8・10)。後北B期の一括資料である。

Tf,T.54からは土器5個体が出土。うち1個体5d【34467】(図8-9)が植物園で確認される。残りの個体のうち5cは旭川市博物館の所蔵が確認される(『旭博目』1095)。全個体が遠藤・大沼(1999)の第12図・第13図に拓本が掲載される。後北B期の一括資料である。

Tf,T.59からは土器2個体が出土。2個体とも植物園で確認される。2a【34463】・2b【34432】である(図9-2・3)。後北B期の一括資料である。

Tf,T.61からは土器4個体が出土。うち2個体が植物園で確認される。4b【34405】・4c【34443】である(図20-2・5)。残りの4a・4cは後藤(1935)の第17図26・20に写真、4aのみ遠藤・大沼(1999)第15図左に拓本が掲載される。後北C<sub>2</sub>-D期の一括資料である。

Tf,T.63からは土器16個体が出土。うち12個体が植物園で確認される。26b【39126】・26c【34431】・26c【34441】・26f【34448】・26g【34406】・26g【38422】あるいは【39137】・26h【39119】・26h【34407】・26i【34437】・26j【38395】・26k【38391】である(図13-4・5, 図14-1~10)。残りの個体のうち、26lは旭川市博物館の所蔵が確認される(『旭博目』1392)。後北C<sub>1</sub>期の一括資料である。

Tf,T.66からは土器が10個体出た。うち2個体が植物園で確認される。10c【34435】・10d【39258】である(図7-4・5)。後北A期の一括資料である。

Tf,T.69からは土器2個体が出土。うち1個体2b【38418】(図4-14)が植物園で確認される。他1個体2aは遠藤・大沼(1999)第15図右上に拓本が掲載される。江別太1期の一括資料である。

Tf,T.70からは土器8個体が出土。うち3個体が植物園で確認される。8a【34397】・8b【39253】・8d【34438】である(図17-4~6)。残りの個体のうち、8fのみ遠藤・大沼(1999)第16図左に拓本が掲載される。後北C<sub>2</sub>-D期の一括資料である。

Tf,T.71からは土器5個体が出土。うち3個体が植物園で確認される。5a【34491】・5b【34490】・5c【34462】である(図18-1~3)。残りの5c・5dは北広島市教育委員会編(2002)写真11に掲載される。後北C<sub>2</sub>-D期の一括資料である。

Tf,T.74からは土器1個体が出土し、植物園で確認される。【38398】(図18-4)である。後北C<sub>2</sub>-D期。

Tf,T.77からは土器3個体が出土。うち2個体が植物園で確認される。3b【34412】・3c【38400】である(図7-1・2)。後北A期の一括資料である。

Tf,T.78からは土器11個体が出土。うち9個体が植物園で確認される。11a【34469】・11b【39257】・11d【38434】・11e【34452】・11f【34473】・11g【38406】・11g【38415】・11h【38403】・11h【34450】である(図10-6・7, 図11-1~7)。残りの個体のうち、11iは旭川市博物館の所蔵が確認され(『旭博目』1090)、11cは遠藤・大沼(1999)第17図に拓本が掲載される。後北C<sub>1</sub>期の一括資料である。

Tf,T.80からは土器2個体が出土。うち1個体2b【38410】(図19-1)が植物園で確認される。残り1個体は遠藤・大沼(1999)第20図左に拓本が掲載される。後北C<sub>2</sub>-D期の一括資料である。

Tf,T.81からは土器7個体が出土。うち2個体12a【34458】・12b【38652】が植物園で確認される(図19-2・3)。残りの個体のうち、12eは遠藤・大沼(1999)第20図右に拓本が掲載される。後北C<sub>2</sub>-D期の一括資料である。

Tf,T.82からは土器4個体が出土。うち3個体が植物園で確認される。10b【34411】・10c【34472】・10h【39123】である(図5-3・5, 図9-7)。10bのみ時期が異なる。それ以外は江別太2期の一括資料である。

Tf,T.83からは土器7個体が出土。うち1個体が植物園で確認される。7b【39122】である(図8-11)。残りの個体のうち、7cは旭川市博物館の所蔵が確認され(『旭博目』1004)、7fは後藤(1935)第7図-7に写真、遠藤・大沼(1999)第21図右下に拓本が掲載される。後北B期の一括資料である。

Tf,T.86からは土器15個体が出土。うち2個体が植物園で確認される。15g【38392】・15k【34456】である(図6-1・2)。後北A期。

Tf,T.89からは土器2個体が出土。2個体とも植物園で確認される。3a【39129】・3b【38420】である(図13-2・3)。後北C<sub>1</sub>期の一括資料である。

Tf,T.91からは土器1個体が出土し、植物園で確認される。2a【38428】(図19-5)である。後北C<sub>2</sub>-D期。

Tf,T.107からは土器5個体が出土。うち3個体が植物園で確認される。7c【38424】・7ê【38426】・7d【38401】である(図18-5~7)。残りの個体のうち、7bは旭川市博物館の所蔵が確認され(『旭博目』1099)、7aは北広島市教育委員会編(2002)写真12に掲載される。後北C<sub>2</sub>-D期の一括資料である。

Tf,T.113からは土器11個体が出土。うち1個体のみが植物園で確認される。15c【34461】(図3-7)である。H317期。

## 4-2. 名取武光調査資料

名取調査資料は、先に触れたように注記内容に不統一な点がみられ、旧報告(名取1933)との照合も十分にはできない。このため出土遺構および共伴関係が復元できた資料は少なく、断片的な結果に終わった。

### 4-2-1. 旧報告と照合された資料

「第二号墳墓」からは土器1個体【34434】(図20-11)が出土。名取も述べるように、土坑墓自体に伴うものか不明である。

「第四号墳墓」からは土器16個体が出土。うち1個体のみ、土器a【39120】(図13-1)が確認された。後北C<sub>1</sub>期。

「第五号墳墓」からは土器9個体が出土。うち6個体が確認された。土器a【38416】・土器b【38419】・土器c【38390】・土器d【39142】・土器f【39136】・土器i【39121】である(図12-1~6)。後北C<sub>1</sub>期の良好な一括資料である。

「第六号墳墓」からは土器2個体が出土。うち1個体、土器aが確認された。「E・M・F□」と注記される【38413】(図17-1)である。後北C<sub>2</sub>-D期。

「第七号墳墓」からは、土器9個体が出土。うち1個体、「E・M・F・H・V」と注記される【39127】(図19-4)が土器aに該当する可能性がある。同一遺構出土とされる土器c・土器d・土器fは旧報告の図版Iに見られるが、現在確認できない。後北C<sub>2</sub>-D期。

「第八号墳墓」からは、土器2個体が出土。うち1個体、土器bが確認された。「E・M・F・H・VII」と注記される【39128】(図19-6)である。後北C<sub>2</sub>-D期。

### 4-2-2. 旧報告と照合されない資料

「No.4」と注記された土器は、1個体【38397】(図19-7)が確認される。後北C<sub>2</sub>-D期。

「No.16」と注記された土器は、1個体【38402】(図20-3)が確認される。後北C<sub>2</sub>-D期。

「No.17」と注記された土器は3個体、【38389】・【38430】・【39254】が確認される(図6-3~5)。後北A期の一括資料である。

「No.19」と注記された土器は2個体、【14351・25008】・【39143】が確認される(図16-3・4)。後北C<sub>2</sub>-D期の一括資料である。

「H20」と注記された土器は1個体【34451】(図16-2)が確認される。後北C<sub>2</sub>-D期。

「H-21」と注記された土器は10個体確認される。【34445】・【34447】・【34454】・【38404】・【38408】・【38433】・【38435】・【38437】・【38438】・【38439】・【38440】である(図3-9・10、図4-1~9)。H37栄町期の一括資料である。

「H-23」と注記された土器は1個体【38405】(図3-1)が確認される。H317期

「HA-34」と注記された土器は2個体、【38421】・【39124】が確認される(図3-3・4)。ただし出土レベルの差が予想され、厳密には一括性はないものと推測される。また【38417】(図3-2)の注記「MA-34」は誤植であるか判断を保留せざるを得ないが、同一遺構出土遺物である可能性がある。H317期。

「Machimura Farm T.P.1」と注記された土器は、1個体【39250】(図20-9)が確認される。また【34430】(図20-8)の注記には、「T.F.」とあるが、同一遺構出土遺物と思われる。遺物・注記内容からして、擦文期の竪穴住居址出土と思われる。

## 5. 若干の考察

### 5-1. 旧豊平川右岸丘陵地における土坑墓群の形成

旧豊平川右岸丘陵地における統縄文期の土坑墓は、総数 1000 基をはるかに越えるとされる。当該期におけるこのような大規模土坑墓群は、現在においても江別周辺域にしか確認されていない。その形成要因には後北期後半における道央石狩低地帯への人口集中が予測されており、この時期における道内の土器型式の斉一化と併せて、集団関係・生業体制等が大きく変化したものと推測されている（木村 1982・2001）。また同時期における列島規模の社会変動との関連を示唆する見解もある（石井 1997・1998）。これらの評価を検討し、解釈をより具体化する上でも、旧豊平川右岸丘陵地における土坑墓群の実態の把握が不可欠である。

しかし現状ではこの試みは未だ困難と言わざるを得ない。その原因として、もっとも豊富な資料が出土したであろう昭和初期における調査の全容が不明で、十分な資料提示がなされていないこと、さらには当時の調査データを活用する上ではかなり資料批判を行わなくてはならないことがあげられる。こうした事態は近年の調査成果を併せ考察する障害ともなっている。このため、ここではこれまで報告された資料を基におおまかな时期的傾向を把握するにとどめる。

統縄文初頭以降後北 C<sub>2</sub>-D 期まで、おおそ継続して土坑墓が確認される。後北 B 期以降には、遺物量の増加がうかがえ、Tf,T.63 や Tf,T.78 など副葬量の多い土坑墓も目立つ。このため旧来からこの時期は後北式の最盛期という評価がなされてきたが、丘陵地全体では必ずしも土坑墓数の顕著な増加はうかがえない。また後北 C<sub>2</sub>-D 期にも、時期が把握される遺構は増加するとは言いがたいようである<sup>12)</sup>。後北 C<sub>2</sub>-D 期末葉を境に顕著に資料が減少する。今回報告したものでは円形・刺突文土器群期の資料は 1 点のみであり、これも後北 C<sub>2</sub>-D 期との間には編年的に断絶が見られる。また同様のことは、現在所在が確認される他の旧豊平川右岸丘陵地出土資料群にもおおそ当てはまる。円形・刺突文土器群期以降における遺物・遺構の減少は、学史的経緯にもうかがうことができ、後北式後半の土器群として「後北 D<sub>2</sub>型式」（名取 1939）や「後北 E 式」（河野 1955）が設定されたものの、札幌帝国大学（当時）構内出土資料を基にしていたことから、後に「北大式」（河野 1958・1959）に呼び替えられている。他遺跡の調査事例からすると土器の副葬行為は継続しており、後北 C<sub>2</sub>-D 期末以降この丘陵地における造墓活動が急速に衰退に向かったものと推測される。

こうした傾向は、出土土器から確実に時期比定された遺構によるものである。副葬行為の盛衰あるいはその社会的意味付けを考慮しなくてはなるまい。また土器以外から遺構の時期比定を行う試みも必要である。しかし不十分な検討ながら、旧豊平川右岸丘陵地において後北式後半期にいたり急激に土坑墓群が形成されたとする従来の見解、さらにはそれを当該期の歴史的動向に直接結びつける解釈には未だ再考の余地がありそうである。確かに地域・遺跡によっては、小樽市蘭島餅屋沢遺跡（小樽市教育委員会編 1991）など後北 C<sub>2</sub>-D 期に土坑墓の急増が確認される事例もある。また恵庭市柏木 B 遺跡（木村編 1981）でも、当該期の土坑墓が大半を占めるとされる。「斉一的様相」と評価されてきた後北式後半期においても、地域・遺跡の個別の様相に即した議論・再評価が必要であろう。具体的なデータを提示せず私見を述べた。稿を改め再論したい。

### 5-2. 道央部における土器群の構成

これまで道央部の統縄文土器の編年研究において、器種構成・文様の変遷過程が詳細に論じられてきた。資料報告の冒頭で触れたように、研究の初期から貼付文の変化に基づき変遷過程が明らかにされ、その後の調査事例・研究報告の増加により議論が進展してきた。さらに近年では、文様変遷の基礎となる割付原理の解明にまで検討が進んでいる（上野 1987・1992、林 1988、熊木 1997・2001、鈴木 1998・2003b など）。本稿で報告した資料もこれらの研究成果を良く裏付けるものと言える。ここでは本報告資料に基づき、断片的ではあるが、これまでの見解に補足する事項をまとめておきたい。

後北 B 期以降、吊耳壺をはじめとした特殊な器種が出現する。それ以前にも小型の鉢・壺など副葬用と想定される器種が見られる。このような器種の出現要因として、鈴木（2004）は恵山文化からの系譜を想定している。後北 C<sub>1</sub>期に少数であるが片口の付加例が確認された。これまで道央部においては江別市萩ヶ丘遺跡出土例（高橋編 1975：Plate5 - 57）が知られる程度であった。また後北 C<sub>2</sub>-D 期における鉢への付加例も確認された。こちらも道央部の土器群においてはこれまで類例が乏しいものであった。後北 C<sub>2</sub>-D 期には主に注口の要素が盛行するが、円形・刺突文土器群期に一般化する片口鉢の系譜を、道央部の土器群においてたどれる可能性が高い。

文様割付では、江別太 1 期以降原則として 4 単位の口縁部突起に対応した、縦位 4 単位の割付が見られる。ただし各単

位は均等とはならず、モチーフが2単位ずつ対となる資料が江別太2期から後北B期まで存在する。これらは熊木(1997)が示唆するように、道東・宇津内式の系譜で理解されるものであり、変遷過程においても道東の土器群と符合するものであろう。その後2単位ずつ対となる文様割付は、後北C<sub>1</sub>期には目立たなくなる。しかし吊耳状突起や片口、口縁部突起など、器形上の特徴において非均等となる要素は存在し、充填される微隆起貼付においても非均等割付の例は存続する。ただし、熊木(前掲)が指摘するように、これらは大枠では道央部・後北式の縦位4単位の割付原理の影響下にあるものと評価できる。後の後北C<sub>2</sub>-D期には注口・把手状突起を付加する個体が盛行し、これらの個体では文様割付は4単位とならず付加部位に対応した構成をとる。こうした後北C<sub>2</sub>-D期における非均等割付の系譜が、後北C<sub>1</sub>期以前から連続的に追えるものであるか、現状ではよくわからない。林(1988)は文様割付の変遷において、同時期の土器群における器種を越えた変容過程を想定している。こうした現象が起こりうるのかを含め、慎重な検討が必要であろう。

文様モチーフの描出技法においては、後北C<sub>1</sub>期まで地紋として存在したRL長条縄文が、後北C<sub>2</sub>-D期にはモチーフを直接描くものとなる。この文様描出工程の根幹に関わる転換は、従来後北C<sub>2</sub>-D期にいたり一般化するという編年の整理はなされてきたが(大沼1982b)、その系譜については十分論じられてこなかった。編年的には恵山式後半の土器群における波状モチーフの描出など、それ以前の段階に長条縄文により文様モチーフを直接描く例はあるが、少なくとも道央部においては後北C<sub>2</sub>-D期まで断絶が見られた。本報告資料において、後北C<sub>1</sub>期に長条縄文による文様描出技法の存在が確認された。道央部の土器群において型式学的な変遷過程を説明しうる可能性を示唆するものであろう<sup>13)</sup>。

以上断片的に触れてきたが、道央部の土器群には異なった系譜の特徴が把握される。文様構成・モチーフの変遷において大沼(1982a)・熊木(1997)が指摘するように、また片口・注口・吊耳状突起の系譜自体は他地域に求められながらも、道央部においては独自の変遷をたどれるように、実際に一時期の土器群が極めて複合的なあり方を示すことは明らかである。また鈴木(2004)は、墓制においても同様に複合的な実態を明らかにしている。このような地域間の土器群、さらにそれらを個別に構成する要素の系統性は、後北式の成立に関する議論のなかで詳細に論じられてきた(木村1975・1982、大沼1980・1982aなど)。これらの見解は北海道域の土器研究、さらには当該期の地域間交渉を復元する上で極めて大きな成果であることは疑い得ない。ただし後北式成立以後を対象としては、土器群を系統的かつ構造的に把握するこうした視点・議論の重要性が十分に認められ、かつ実践されてきたとは言えないのが現状である。特に道央部の土器群においては、資料数が豊富で詳細な検討が可能なることから、その変遷過程が当該地域の土器群によってのみ説明される場合もある。続縄文期における集団交渉のあり方を復元し、その歴史的動向を明らかにする上でも、土器群を構造的に理解する基礎的な検討が急務であろう。

### 5-3. 名取武光の調査活動に関して

今回の検討では名取調査資料において、旧報告(名取1933)との照合が不十分に終り、当時の調査状況の復元は困難と言わざるを得ない。大きな原因は調査当時の情報が資料に十分記載されていないことによる。資料の遺存状態や、その後の研究者間のやり取りにより、旧報告資料が今回検討対象とした中にそもそも存在しない可能性は高い。また照合された例からすると、旧報告に記載された法量値からの同定は困難である。

しかし一方で、明らかに照合できない資料が存在することも事実である。旧報告には、土坑墓の調査数は10基とあるが、遺構番号と推定される数字は、それをはるかに超えるものである。これらの数字は必ずしも土坑墓のみを示さない可能性もある。旧報告に記載されないものの、今回検討した資料からは擦文期と思われる竪穴住居址の調査が推測される。だが、「NO.17」・「NO.19」・「H-21」といった良好な出土例においても、旧報告の記載と照合はできない。また注記には複数の書式が確認され、遺構番号をローマ数字で表記するもののみが旧報告と照合可能であった。さらに名取は、少なくとも1934年(昭和9)の夏頃までは、町村農場における後藤の調査に協力している(北広島市教育委員会2002:30頁)。これらの状況証拠からすると、旧豊平川右岸丘陵地における名取の調査は、報告されている10基にとどまらないことは明らかである。さらには、「名取は昭和十五年一月一七日に(中略)竪穴様墳墓の存在することを知つた。当時江別兵村の後北式土器の竪穴墳墓の発掘を終つた時なので、(後略)」(名取1960:192頁、傍点引用者)という記載からすると、後藤らより後の時点、1940年頃まで継続して調査を行っていた可能性が高いと言えよう。



## おわりに

以上、植物園に所蔵されている旧豊平川右岸丘陵地出土資料の一部を報告してきた。詳細を明らかにできなかった資料もあるものの、現代的に見ても貴重な資料群であることは疑い得ない。無論、報告した以外の資料の提示、あるいは今回の資料についても、さらなる検討が必要なことは言うまでもない。出土資料自体の検討に併せて、植物園に残された調査当時のガラス乾板等の記録整理も不可欠であろう。また旧豊平川右岸丘陵地出土資料以外にも、多くの貴重な資料群が植物園には所蔵されている。将来的にこれらの概要なりとも報告し活用可能な状態にすることは、主に北海道において考古学研究に携わる者に課せられた課題であろう。

## 謝辞

本稿の内容は、2004年3月2日に植物園内において行われた平成15年度植物園研究発表会で一部報告したものである。発表の場では多岐に渡る率直なご意見・ご質問を頂いた。また本稿の作成に当たり多くの方々にお世話になった。植物園助手の加藤克氏・同技官市川秀雄氏には、数年越しの断続的な資料化作業を温かく見守って頂き、全面的なご支援・ご協力を頂いた。大沼忠春氏（北海道教育庁）・遠藤龍畝氏（北広島市教育委員会）には本資料群に関連した多くのご教示を頂き、未発表の後藤寿一氏調査ノートを閲覧させて頂いた。資料の編年的位置づけや評価、続縄文期の墓制に関しては鈴木信氏（財団法人北海道埋蔵文化財センター）にご教示頂き、氏の公表前の論考を拝読させて頂いた。また一部資料の復元・実測・トレース・写真撮影等においては、荒山千恵・湯川枝里子両氏（北海道大学大学院文学研究科・文学部）の貴重なご助力を得た。無論存在するであろうすべての誤りが筆者に帰することは言うまでもない。このほか下記の方々・諸機関にも多くのご教示・ご協力を頂き、資料見学等に際してもお世話になった。末筆ながら記して深く感謝申し上げる次第である。（五十音順・敬称略）

青野友哉・赤井文人・石本省三・加藤博文・木山克彦・熊木俊朗・小杉康・後藤秀彦・笹田朋孝・瀬川拓郎・高倉純・高瀬克範・長谷部一弘・林謙作・林勇介・疋田透・福田正宏・守屋豊人・山田央

旭川市博物館・浦幌町立博物館・北広島市教育委員会・市立函館博物館・伊達市教育委員会・七飯町歴史館・北海道大学埋蔵文化財調査室

## 注

- 1) 後藤寿一調査資料が植物園に収蔵された詳しい経緯は不明である。後藤は1940年（昭和15）1月から1943年（昭和18）春まで内モンゴルに渡り蒙古興亜院に勤務している。大沼忠春氏からのご教示によると、この転籍の折に資料の委託あるいは寄贈が行われた可能性が高い。
- 2) 近年の資料の収蔵状況については、市川秀雄氏からご教示いただいた。
- 3) 当時の研究者間には、活発な資料のやり取りがうかがえる（宇田川編1984、北広島市教育委員会編2002など）。このため厳密には現在植物園に当時の報告資料が収蔵されているか、確認は困難である。植物園以外にも断片的に名取・後藤調査資料は確認される。
- 4) 後藤の遺物番号の記載には、 에스プラントの大文字と小文字両方が使用されており、両者の間には厳密な使い分けは見受けられない。本稿では、引用箇所を除き小文字に統一し記載する。
- 5) 名取は1949年（昭和24）農学部博物館から北海道大学教養部への転任しており、「博物館」と印字されたラベルはこの転任に前後する時期に使用されたものと推定されている（加藤2004：15頁）。これは記載内容からの推測とおおよそ合致する。
- 6) ただし遠藤・大沼（1999）には「15j」とある。
- 7) 旧報告に掲載された写真では検討が難しいが、植物園には原版的ガラス乾板（整理番号6M-50）が残されており、これを用い4個体の資料（【38419】・【38390】・【39142】・【39136】）の同定を行った。なおこの乾板には「江別町村農場 H-IV 土器 4ヶ」と注記される。
- 8) 遠藤・大沼（1999）に『大成』図版201とあるのは誤りである。『大成』図版201の資料は【34441】（Tf,T.63 26c）である。
- 9) 現在注口上部の突起が欠損するが、『美術』・『大成』には欠損以前の状態で写真が掲載されている。
- 10) 注記にある「B. NATORI」とは、名取武光の姓名を音読み表記したもの（「Buko Natori」）である。この表記は、1930年代初期における名取の動物学関係の英文著作に見られる（松下編1968）。その後、少なくとも1930年代末以後の著作にはこの表記はとられない。注記の作成時期を1930年代初期～半ばとすることができよう。

- 11) 高倉 (1958) には「古墳から出た土師器」(18頁)とあるが、誤りであろう。
- 12) ただし、現在の旧豊平河畔遺跡周辺(図2-II・III・V・VIIなど)では後北A期に土坑墓数が最多となりその後減少、坊主山遺跡周辺(図2-VIII)においては、後北C<sub>2</sub>-D期に最多となる傾向は認められる。
- 13) ただし主に道南部の後北C<sub>1</sub>期の土器群において、長条縄文で重畳化した波状モチーフを描く個体が見られる。こうした恵山式末葉の系譜で考えられるタイプを介し、後北C<sub>2</sub>-D期に長条縄文による文様モチーフの描出技法が一般化する過程も想定される。また近年の調査成果からすると、恵山式の下限は後北B期とする見解が一般的であるが、乾(1983)・上野(1992)らが触れるように浦幌町十勝太若月遺跡(石橋・山口・後藤・河村1975)などで、後北C<sub>1</sub>式との共伴が確かめられている。後北式と恵山式終末との編年的整理もあわせ、再検討する必要があるであろう。

## 引用・参考文献(五十音順)

石井淳

1997「北日本における後北C<sub>2</sub>-D式期の集団様相」『物質文化』No.63 23-35頁 東京・物質文化研究会。

1998「後北式期における生業の転換」『考古学ジャーナル』No.439 15-20頁 東京・ニューサイエンス社。

石橋次雄・山口敏・後藤秀彦・河村七五三喜

1975『十勝太若月-第三次発掘調査-』 浦幌・浦幌町教育委員会。

乾芳宏

1983「十勝太若月遺跡の恵山式土器をめぐって」『十勝考古』第6号 57-60頁 帯広・十勝川流域史研究会。

上野秀一

1987「3-1 土器」上野・加藤邦雄編『札幌市K135遺跡4丁目地点5丁目地点』(札幌市文化財調査報告XXX) 172-229頁 札幌・札幌市教育委員会。

1992「北海道における天王山式系土器について-札幌市K135遺跡4丁目地点出土資料を中心に-」加藤稔先生還暦記念会編『加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集』 763-808頁 仙台・今野印刷。

宇田川洋編

1984『河野広道ノート』(考古篇5) 札幌・北海道出版企画センター。

遠藤龍敏・大沼忠春

1999「北海道江別市・旧豊平川右岸丘陵地の竪穴様墳墓資料について-後藤寿一江別遺跡調査資料を中心に-」日本考古学協会1999年度釧路大会実行委員会編『海峡と北の考古学』(資料集II) 109-46頁 釧路・同大会実行委員会。

小樽市教育委員会編

1991『蘭島餅屋沢遺跡』(小樽市埋蔵文化財調査報告第2輯) 小樽・小樽市教育委員会。

大沼忠春

1980「続縄文文化」野村崇・菊池俊彦編『北海道考古学講座』 127-50頁 札幌・みやま書房 (初出1977『北海道史研究』第12号 63-80頁 札幌・北海道史研究会)。

1982a「道央地方の土器」加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文文化の研究』第6巻 72-93頁 東京・雄山閣。

1982b「後北式土器」加藤晋平・澤四郎編『縄文土器大成』第5巻 127-29頁 東京・講談社。

2001「前期続縄文時代の北海道文化の諸相」文部省科学研究費(地域連携推進研究)古人骨と動物遺存体に関する総合研究シンポジウム実行委員会事務局編『もう一つの日本文化-続縄文の人と文化を考える-』 13-17頁 伊達・同シンポジウム実行委員会。

加藤晋平・澤四郎編

1982『縄文土器大成』第5巻(続縄文) 東京・講談社。

加藤克

2001「北海道大学農学部博物館所蔵考古学資料(1)」『北海道大学農学部博物館研究紀要』第1号 19-34頁 札幌・北海道大学農学部博物館。

2004「札幌農学校所属博物館のアイヌ民族資料」『北大植物園研究紀要』第4号 1-54頁 札幌・北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園。

北広島市教育委員会編

2002『後藤寿一考古学関係調査資料』(北広島市文化財調査報告I) 北広島・北広島市教育委員会。

木村英明

- 1975『続縄文時代の墓壙群の研究 - 石狩町紅葉山 33 号遺跡の例 - 〔資料編〕』 石狩・紅葉山 33 号遺跡調査団・石狩町教育委員会。  
1982「「後北式」土器の成立について」『考古学研究』第 28 巻第 4 号 12-25 頁 岡山・考古学研究会。  
2001「続縄文文化の社会、経済、文化 - 北東アジア・北太平洋沿岸交易網への序章」文部省科学研究費（地域連携推進研究）古人骨と動物遺存体に関する総合研究シンポジウム実行委員会事務局編『もう一つの日本文化 - 続縄文の人と文化を考える - 』 1-16 頁 伊達・同シンポジウム実行委員会。

木村英明編

- 1981『北海道恵庭市 柏木 B 遺跡発掘調査報告書』 恵庭・恵庭市教育委員会。

熊木俊朗

- 1997「宇津内式土器の編年 - 続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位(1) - 」『東京大学考古学研究室紀要』第 15 号 1-38 頁 東京・東京大学考古学研究室。  
2000「下田ノ沢式土器の再検討 - 続縄文時代前半期の北海道東部における土器型式の動態 - 」『物質文化』No. 69 40-58 頁 東京・物質文化研究会。  
2001「四・3 後北 C<sub>2</sub>・D 式土器の展開と地域差 - トコロチャシ跡遺跡出土土器の分析から・続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位(2) - 」東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・常呂実習施設編『トコロチャシ跡遺跡』 176-217 頁 東京・東京大学大学院人文社会系研究科。

河野広道

- 1933a「北海道江別町円形竪穴式墳墓発見の石器時代人一頭骨とその埋葬状態」『人類学雑誌』第 48 巻第 6 号 311 - 15 頁 東京・東京人類学会。  
1933b「北海道式薄手縄紋土器群」犀川会編『北海道原始文化聚英』 16-18 頁 東京・民族工芸研究会。  
1955「先史時代史」『斜里町史』 斜里・斜里町（河野広道著作集刊行会編 1972『続々北方文化論 河野広道著作集Ⅲ』 271-345 頁 札幌・北海道出版企画センター）。  
1958「先史時代篇」網走市史編纂委員会編『網走市史』上巻 1-270 頁 網走・網走市（河野広道著作集刊行会編 1972『続々北方文化論 河野広道著作集Ⅲ』 1-270 頁 札幌・北海道出版企画センター）。  
1959「北海道の土器」『郷土の科学』23（河野広道著作集刊行会編 1972『続々北方文化論 河野広道著作集Ⅱ』 282-308 頁 札幌・北海道出版企画センター）。

後藤寿一

- 1932「古墳の発掘について 江別遺跡調査報告第一報」『蝦夷往来』第八號 37-45 頁 札幌・尚古堂。  
1934「北海道の先史時代についての私見」『考古学雑誌』第 24 巻第 11 号 9-27 頁 東京・日本考古学会。  
1935a「石狩国江別町の竪穴住居址について 江別遺跡調査報告第二報」『考古学雑誌』第 25 巻第 2 号 29-49 頁 東京・日本考古学会。  
1935b「石狩国江別町に於ける竪穴様墳墓について 江別遺跡調査報告第三報」『考古学雑誌』第 25 巻第 5 号 42-71 頁 東京・日本考古学会（後藤 1976『北海道先史時代考』2 76-107 頁 札幌・北海道出版企画センター）。

小林達雄編

- 1989『縄文土器大観』第四巻（後期 晩期 続縄文） 東京・小学館。

犀川会編

- 1933『北海道原始文化聚英』 東京・民族工芸研究会。

市立旭川郷土博物館編

- 1976『市立旭川郷土博物館所蔵品目録』V 旭川・市立旭川郷土博物館。

市立函館博物館編

- 1994『市立函館博物館蔵品目録』7（考古資料篇 4） 函館・市立函館博物館。

鈴木信

- 1998「X・3 I 黒層の土器について」財団法人北海道埋蔵文化財センター編『千歳市ユカンボン C15 遺跡(1)』（北埋調報 128） 329-39 頁 江別・財団法人北海道埋蔵文化財センター。  
2003a「続縄文～擦文期の渡海交易の品目について」『北海道考古学』第 39 輯 29-47 頁 江別・北海道考古学会。

2003b 「Ⅶ-3 道央部における続縄文土器の編年」財団法人北海道埋蔵文化財センター編『千歳市ユカンボシ C15 遺跡(6)』(北埋調報 192) 410-52 頁 江別・財団法人北海道埋蔵文化財センター.

2004 「道央部における続縄文初頭～後北式期の墓制 - 土坑墓の分析」財団法人北海道埋蔵文化財センター編『恵庭市柏木川 13 遺跡』(北埋調報 203) 143-52 頁 江別・財団法人北海道埋蔵文化財センター.

高倉新一郎

1958 『江別の誕生』 江別・江別市役所.

高橋正勝

1984 「北海道中央部の続縄文時代 - 江別の恵山式土器群と江別太式・坊主山式土器群 - 」野村崇編『北海道の研究』1 (考古篇 I) 355-84 頁 大阪・清文堂.

高橋正勝編

1975 『後北式土器実測図集』 発行地不明・北海道先史学協会.

1981 『元江別遺跡群』(江別市文化財調査報告書XⅢ) 発行地不明・北海道先史学協会.

千代肇

1965 「北海道の続縄文文化と編年について」『北海道考古学』第1輯 19-38 頁 札幌・北海道考古学会.

名取武光

1933 「北海道江別兵村に於ける竪穴式墳墓の発掘報告」『考古学雑誌』第23巻第11号 27-44 頁 東京・日本考古学会.

1939 「北海道の土器」長坂金雄編『人類学・先史学講座』第十巻 1-42 頁 東京・雄山閣.

1960 「網と釣の覚書」『北方文化研究報告』第15輯 141-205 頁 札幌・北海道大学.

林謙作

1988 「Ⅱ-3-1 土器」吉崎昌一・岡田淳子編『北大構内の遺跡』6 26-35 頁 札幌・北海道大学.

松下巨編

1968 「名取武光先生著作目録」『北海道考古学』第4輯 3-7 頁 札幌・北海道考古学会.

松田宏介・加藤博史

2004 「須田信氏収集資料の紹介」『北海道考古学』第40輯 189-96 頁 札幌・北海道考古学会.

森田知忠

1967 「北海道の続縄文文化」『古代文化』第19巻第4号 39-50 頁 京都・古代学協会.

山内清男・甲野勇・江坂輝弥編

1964 『日本原始美術』第1巻 東京・講談社.